

---

# つららの杭

岳石祭人

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

つららの杭

### 【Nコード】

N4464D

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

雪山で男性がつららに胸を突かれた姿で死亡する。現場の山小屋で撮られた写真には女性の霊が。30年前に事故死した少年との関わりは？犯人は「雪女」なのか？2枚の心霊写真を霊能力者紅倉美姫はどう視る？語られる「雪女伝説」の真相とは？

## 第1章 あらまし（前書き）

季節物ということで大急ぎで書き上げました。（それなのに今年  
はあんまり雪降ってないなあ）

霊能力者紅倉美姫シリーズの第3弾です。

紅倉美姫と彼女のアシスタント芙蓉美貴については第1弾「死神  
はあなたよ！」をどうぞお読みください。（全然別の話なので読ま  
なくてもかまいませんが）

長いのを読むのが面倒な方は「第6章 解題」だけでも短編とし  
てお楽しみください。（1日1章ずつアップしていきます）  
それではどうぞ。

## 第1章 あらまし

12月の頭のことである。雪山で4人のパーティーが遭難し、若い女性1人だけが捜索隊によって保護された。中年の夫婦は各々山中で凍死しているのを発見された。

問題は山小屋の入り口で発見された男性である。

入り口は開け放たれていた。宿泊施設ではなくほんの小さな休憩用の小屋だ。床高もなく、地面に1本横木が乗っているだけで、発見当時扉は雪に埋もれて動かなくなっていた。

死体にも雪が降り積もり、人型に丸く盛り上がっていた。

そこに、軒から伸びていたのであるう、長い極太のつららが突き立っていた。

雪をのけると、それは白い肌着を着ただけの男性の胸に深々と突き刺さっていた。

男性は苦悶の末にあきらめたといった顔をしていた。

出血はほとんど無かった。この「つららの杭」が死因であろうが、男性の体は凍り、傷の割には痛みは感じなかったのかもしれない。

しかし何故吹雪の極寒の中男性は裸に近い格好でいたのか？

保護された女性も薄着の上に防寒着を引っかけたかっこうで、保護されたとき手足が凍傷にかかり、あわや切断しなければならぬ状態をかるうじて助かった。

当時女性は意識を半分失った状態で、事情を説明できる状態ではなかった。女性の衣服は男性の死亡していた山小屋の中に置かれていた。

1週間の入院で女性はようやく落ち着きを取り戻したが、男性といつしよにいたであろう山小屋で何が起こったのか？何故衣服を着ずに防寒着を引っかけただけで吹雪の中に飛び出したのか？記憶がすっぱり抜け落ちていた。

事件は謎のまま、年を越した。

「この記事なんですがね、いかがでしょう？」

三津木はページを開いた週刊誌を紅倉に差し出し、横から芙蓉にさらわれた。

芙蓉はそれを見せるに値する物かどうか冷たい目で検閲した。三津木は芙蓉の相変わらずの保護者ぶりに呆れた。

三津木俊作（みつぎしゅんさく）、38歳、東日テレビ「ほんとうにあつた心霊事件ファイル」のチーフディレクター。

所は都内某高級住宅街にある広大な敷地に建つ広大な屋敷の応接間。霊能力者紅倉美姫（べにくらみき）の住居である。芙蓉美貴（ふようみき）は彼女のアシスタントで、ここにいつしよに住んでいる。週に2度通いのメイドが掃除に来るだけで、この広い屋敷に二人の他に住人はいない。

「見せてよ、美貴ちゃん」

紅倉にねだられて芙蓉は三津木を冷たい目で一睨みして週刊誌を紅倉に渡した。芙蓉は先生に馴れ馴れしい三津木を嫌っている。芙蓉が先生のアシスタントになる以前からの付き合いなので嫉妬もある。三津木は若い芙蓉の一途な先生思いにいつも苦笑させられる。

週刊誌を受け取った紅倉は眉間にしわを寄せて本を顔に近づけたり離したり一生懸命読もうとしたが、紅倉の視力で白黒の印刷物は判読できまい。案の定紅倉は週刊誌をテーブルに放り投げた。

「で、何が書いてあるの？」

「先月初めに秋田県の取宇美（とうみ）山で遭難事故のあったのをご記憶ですか？」

「うーん、あつたの？」

「あつたんです」

ちなみに以下の地名、人命は仮名である。取宇美山を地図で捜しても無い。

「4人が遭難して、女性1人だけ保護、後の3人は亡くなっていま

す。

内訳はこうです、

保護された女性は常磐尚美（ときわなおみ）、21歳、都内の私立大の学生です。

山小屋で死んでいるのが発見された男性は山崎忠男（やまざきただお）、24歳、都内の商社に勤めていました。

山中で凍死していた二人は小田辺保幸（おだべやすゆき）35歳、小田辺恵美（おだべえみ）36歳、二人は夫婦です。夫の保幸は山崎忠男と同じ商社に勤務していました。二人は山形の大学のOBと後輩で、山崎忠男がこの会社に入社したのは小田辺を頼ったようです。二人とも出身は山形です。妻の恵美は近所のスーパーでパートをしていました。二人には10歳になる息子が一人います。

ああそれと、常盤尚美は小田辺恵美の姪めいです。恵美の歳の離れた兄の娘です。

遭難事故については、ご存じない？」

紅倉は首を振り、芙蓉も首を振った。三津木は得意げにニンマリして芙蓉にまた冷たい視線を突きつけられた。

「事故の起こったのは12月1日、土曜日のことです。前日の内に秋田のそれぞれの実家に到着し、翌日、日帰りの予定で山に入りました。

天気は快晴でした。

3日前に1度まとまった雪が降りましたが、まあ、地元の人間にしたらどうということのない積雪でした。

取宇美山は横に長い山で、登山道もいくつもあります。標高200メートルと高いですが、それも3つある頂いたadakiの一番高いところで彼らを選んだのは初心者にも安全な一番緩やかなコースです。

朝6時に待ち合わせて、7時に登頂開始、11時30分に目的の6合目の頂に到着しました。そこで休んで弁当を食べ、12時10

分、下山を開始したところ、天気は激変し、遭難しました。

当時『冬山を舐めるな』と糾弾する声がありました。彼らには酷です。天気は快晴で、天気予報でも一日晴れの予報でした。しかも彼らはきちんと冬山登山の服装をしつかりし、ザイルに、念のためスノーフット・カンジキですね、それまで用意していた。常盤尚美が初心者でしたから、念を入れて準備万端整えていたわけです。山崎忠男と小田辺保幸は何十回と取宇美山に登っていますし、小田辺恵美も夫と一緒に数回登っています。それでも遭難して命を落としました。それです。天気は急変がいかに極端で、激しかったか。これも大げさでなく昨今の地球温暖化の影響でしょうね。地元の登山家たちもこんな天気の激変は記憶にないと言っていましたから。

天気は吹雪になり、それは激しく3日間続いた。緩やかな登山道でありながらそれでも3日間救助隊が山に入ることが出来なかつた。4日目の朝になってようやく吹雪が収まってきて捜索隊が登山を開始したところほどなく2合目を過ぎた辺りで半狂乱の体の常盤尚美を発見、保護しました。

常盤尚美はただちに病院に運ばれましたが、かろうじて気を失っていないだけで、むしろ目を開けながら悪夢にうなされている状態で、とても他の者がどうなったのか聞ける状態ではありませんでした。ひどい凍傷で、手足を切断しなければならぬ本当にギリギリのところでした。

昼前には吹雪が止み、本格的な捜索が展開され、やがて4合目の山小屋で山崎忠男が死体で発見され、次いで5合目で小田辺恵美が凍死しているのが発見され、翌日小田辺保幸が登山道を大きく反れた斜面の下の方で凍死しているのが発見されました。

死体発見の状況から想像されるのはこうです。

下山を始めたところ急激な吹雪に見舞われた。あまりに激しい吹雪に常磐尚美、山崎忠男のペアと、小田辺夫妻のペアに分かれてしまった。常磐山崎ペアはなんとか4合目の山小屋にたどり着くこと

が出来たが、小田辺夫妻は吹雪の中立ち往生し、やがて保幸氏が強風に煽られるかなにかして登山道を反れ斜面を滑落、残された恵美さんは為す術もなく座り込み、やがて、残念ながら二人とも凍死した・・・」

三津木は話をいったん切り、紅倉の表情をうかがった。

「どうです、先生？」

紅倉は「ふうーん」と口の中で言った。

「問題になっているのは山小屋の男の人？」

三津木は嬉しそうに「そうです」と言った。目が嫌らしく輝き、

オカルトテレビ番組のディレクターの本性が現れている。

「どんな風に死んでいたか、分かりますか？」

「雪女にでも凍らされた？」

「いやあー、違うんですなあー」

嬉しそうに言つてまた芙蓉に睨まれた。

「たしかにね、あるんですよ、雪女の伝説は。でもですね、とても事故とは思えない死に方をしていたんですよ。」

発見されたとき山崎は雪に埋もれていたんですが、その雪をどかすと、なんと、彼の胸にはまるで杭くわいのように図太くわいいっつららがグサツと突き立っていたんです！ 雪女じゃなくてドラキュラだったんですなあー！」

調子に乗つてアハハと笑いそうになつて慌てて引つ込めた。

「長さ60センチ、太い部分の直径は10センチもあったそうです。先端が10センチ、あばらの間から肺に突き刺さつて、死因はこの傷に間違いないです。かなり大きな傷のはずですが、出血はそれほどではなかったそうです。傷口にピタツと栓がされていたせいでしょう。ですが肺に血が溢れて、ものすごく苦しかったと思うんですが、目撃者によるとそれほど苦しそうな死に顔ではなかったそうです。」

苦痛には違いないが、すっかりあきらめて死を受け入れたような、そんなわりとすっきりした顔をしていたそうです。

おそらく低温のせいで感覚が鈍くなっていたんでしょう。不幸中の幸いといきましょうか。

ところで低温といえば、そのつららですがね。

つらら……って、ご存じですよね？」

紅倉はこくんとうなずいたが、芙蓉の方は「まあ……」ときこちない返事をした。

「芙蓉さんは、見たことがない？」

「あるわよ。……ほんの小さなんだけど……」

紅倉がちよつと驚いたように言った。

「ふうん、そつか、こつちの方つてつららができないんだ？」

芙蓉は千葉の出身だ。芙蓉の方こそ驚いた。

「先生はご覧になったことがあるんですか？」

質問してしまつてから芙蓉は後悔したが、紅倉はあっさりうなずいた。

「覚えているわよ。子どもの頃、冬には新幹線の高架下にすつごい大きい……2メートルくらいもあるつららがよきによき生えていたわよ。ぶら下がっているのに生えてるとは言わないかしら？」

と、紅倉は子どもみたいに笑った。芙蓉は心の中の「先生メモ」に「先生は子どもの頃は視力が良かったらしい」「先生は寒い地域の出身らしい」と書き込んだ。

「まさにそんな感じですよ」と三津木が言った。

「そんな巨大な……さすがに2メートルはありませんが、1メートルもあるつららが小屋の屋根から生えていたんです。これ、どう思います？」

芙蓉にはさつぱり分からない。紅倉は

「火はどうだったの？」

と訊いた。三津木は「さすが先生！」とおだてて芙蓉に説明してやった。

「つららつてのは上から滴ってくる水が凍っていつて下に伸びていった物なんです。だからつららができるっていうのは、それだけ上

から水が滴ってこなければならぬです。屋根から伸びたつらははぶつう屋根に降った雪が溶けて、したたつてきた物なんです。これが10センチやそこらのつららなら自然に空気中の水分が固まった物といえるんですが、1メートルもの大きい物となると、それだけの大量の水が、どこから来たのが問題になります。ちなみに小屋の周りに沢やまして滝なんてありません。

で、先ほど先生の指摘された『火』ですが、ほんの休憩用の小屋でストーブなどの暖房機はありません。熱を発する物といって、携帯用のカイロしか持っていませんでした。そんな物で屋根の雪を大量に溶かしたとは考えられません。

これじゃあまるで・・ねえ？」

三津木は悪趣味な笑いを紅倉から芙蓉に向けた。芙蓉は答えたくない。

「やっぱり雪女？」

紅倉が答えてしまった。

「ですよー、やっぱり？」

三津木は実に嬉しそうで腹立たしい。

「しかしこの雪女はバイオレントですなあー、男を凍らせるに飽きたらずつららの杭で打ち殺しちまつたんですから！」

紅倉は愛想笑いを見せた後言った。

「で、犯人は雪女だったの？」

「犯人・・」と三津木は呟き言った。

「そこなんです。これはこれまで事件ではなく事故として扱われてきたんです。われわれ世間に対してはね。

もちろんこれは殺人でしょう。

犯人は常磐尚美です。

犯行の経緯はこうでしょう、

吹雪の中二人は山小屋に閉じ込められた。暖房器具はない。寒い。そこで山崎忠男が提案した、裸で抱き合って暖め合わないか？と。

常盤尚美は薄着でならとといったんは承知し、おたがい肌着のかっこうになって抱き合った。

が、山崎はそれ以上を求めた。常盤尚美は驚き、拒否し、そのまま小屋を飛び出した。山崎は慌てて彼女を追い、常盤尚美は、ドアを開けたときに折れたつららを抱え、追いかけてきた山崎に突き出した。それは山崎の胸に深々突き刺さり、山崎はひっくり返って動けなくなった。

常盤尚美はパニックに陥り、防寒着だけ引っかけて雪山を下りだした。

そしてようやく吹雪が収まってきて、搜索を開始した搜索隊に保護された、

と、そういうことでしょうね。

別の第三者の犯行と絶対に言えなくはないですが・・・、まあないでしょう。

犯人は常盤尚美です。しかし彼女は病院で回復後も遭難してからの記憶をすっかり失っていて、自分が何をしたか、をまるで覚えていないんです。

それにねえ・・・、可能ですか？　いくらシャツ一枚とはいえ、つららで人間の胸を貫くなんて？」

「できちゃったんでしょ？」

「できちゃったんですけれどね。納得しますか？」

「さあ？」

紅倉は肩をすくめた。芙蓉はつららという物がどの程度の強度を持つのかさっぱり分からない。

「実際そういう状態で殺されているわけですから、殺人は明白なんです。しかし、出来過ぎてますでしょう？　実際起こってしまったわけですが、それも偶然の事故、と言えるんじゃないか？と、まあ警察の方でも煮え切らないんですね。それでわれわれマスコミにはただ『事故』としか知らされていなかったわけですよ。」

「この本が出るまではね」

と、三津木は改めてその記事のページを開き、芙蓉の方に向けた。読め、ということだ。

「『吸血雪女の恐怖！血を吸う氷の杭！』」

「・・・三津木さんの番組のタイトルみたいですね？」

「先を越されましたね」

と三津木は芙蓉の嫌味をはねのけて笑った。

「この記事で山崎忠男の死因がつららを凶器とした刺殺であると暴露されてしまったわけです。先ほど先生もおっしゃった高いところから大きなつららが落下してきて頭を殴打されて大けがを負ったとか死亡したとかいう事故ならあるわけですが、突き刺した、では事故じゃ済まないですからね。それに・・・わたしどもの興味というのはこっちの方です・・・」

三津木は見開きページの上半分を占める写真を示した。問題の山小屋の全体が写った写真。なるほど木の板を張っただけの小さな小屋で、下半分が雪に埋もれ、せいぜい２メートル半くらいの高さの屋根からその雪に突き刺さりそうに長く太いつららが、まるでノコギリの刃かテイラノサウルスの歯のように、伸びている。扉が開き、その出入り口にもすでに50センチくらいのつららが数本伸び、扉の軸＝蝶番（ちょうばん）のある側は上から氷が覆って扉が閉まらないようになっている。足元の雪は靴跡で踏みつぶされている。

その開いた扉の軸の氷から吹き出しが伸び、その部分の拡大写真が載っている。

女の影、に見える。

ちょうど奥の暗がり立ち、氷のレンズを通して写っているようにも見える。また氷の表面に映像が投影されているようにも見える。黒髪の長い女の横顔だ。うつむいて、足元を見ているようにも見える。肩から胸の辺りで氷が斜めに切れている。色はない。だから

偶然光と影がそのような姿に映り込んでいるだけだ、と常識人なら説明するだろう。

「どうですか？」

三津木は実に嬉しそうにその女の影を指でクルクル囲って言った。芙蓉はチラツと先生を横目に見てその写真に霊波を集中させた。悔しいが、

本物だ、と思った。

「先生、これは・・・」

「どうやらそうのようね。でもねえ・・・」

紅倉はあまり乗り気ではない。

「こんなのはどこにでもいるしい・・・」

芙蓉はもう一度写真に集中した。例によって幽霊独特の偏執的な強い思い込みが感じられた。ただそれが何に向けられているのか、そこまで芙蓉の霊能力では分からない。

どこにでもいると言えばどこにでもいる幽霊だ。これだけはつきり姿を見せているというのはかなり自己主張が強いが、それでも芙蓉たちのような人間には珍しくもない。しかしここで人が死んでいるとなると、何故先生が積極的な興味を持たないのか芙蓉には合点がいかない。

紅倉はもう飽きてしまったようにつまらなそうな顔でそっぽを向いている。

その様子に三津木もガツカリしたように乗り出した身を引いた。「興味ないですかあ。じゃあ・・・<sup>がくと</sup>岳戸先生のところに行っていきますか」

岳戸というのは紅倉先生のライバル・・・と本人が思い込んでいる女霊能師だ。芙蓉はこの女が大嫌いだった。

三津木が週刊誌を回収しようと手を伸ばすと、紅倉がピシヤンと本の上に手を置いた。むっつりと、

「どうするの？」

と訊いた。三津木は上機嫌に説明した。

「いつも通りです。現地を取材して・・等々力とつりまさんに頼みますがね、取材して何か面白いネタがあったら再現VTRを作ります。それをスタジオで先生に視てもらって、解説をお願いします、と」

紅倉はため息をついて背もたれに身を沈めた。

「そのくらいならかまいませんけど」

三津木はすかさず、

「何かありましたらアドバイス、よろしく」

とニコニコ言った。この馴れ馴れしさが芙蓉は許せないのだ。

## 第2章 取材

等々力カ（とどろきちから）、45歳。映像製作会社「アートリング」社長兼ディレクター兼カメラマン。秘湯ロケやアイドルのイメージビデオを製作したりもするが、ほぼオカルトが専門。根っからの好き者である。東日テレビの「ほんとうにあった心霊事件ファイル」は三津木と等々力が二人で作っているようなものだ。

1月下旬、等々力は精鋭部隊6名（経理担当の奥さんとバイトの娘以外の全員）を引き連れて秋田県柚元市に入った。緑豊かな田園都市であり、国道沿いの景色は白く雪化粧の平原が広がっていた。

降雪量は例年の3分の1にも充たない20センチ。ただし降ったり止んだり、晴天荒天の差が極端だという。等々力一行が訪れたこの日、空は真つ青に晴れ上がっていた。

午後には到着すると2隊に分かれた一行は1隊をホテルの手配と山の状況の把握に当たらせ、等々力率いるもう1隊はふもとのある地域の取材に当たった。

出発前の下調べ。

一つの事件を見つけた。

秋田県柚元市元洲町（ゆもとしもとすちょう）。

事件の起きた取宇美山の東端のふもとの集落である。住宅地としては柚元市の南の外れでもある。

30年前ここで一件の悲惨な事故が起きた。

日本海から内陸に長い取海山の東端のこの地は冬の寒波の影響がもつとも緩やかな地域である。日本海側では3メートルを越す大雪も、こちらは1メートル20かそこらで済む。

しかし30年前のその冬、記録的な大雪に見舞われた。元洲町でも2メートル50の積雪があった。

事故の被害者は森行雄（もりゆきお）、中学3年生の15歳。  
行雄は2月初旬の日曜日、前夜に降り積もった屋根の雪下ろしを  
やっていた。

この辺りは一軒当たりの土地が広い。

雪下ろしを終えた後、行雄はふざけて屋根から雪の積もった庭に  
仰向けにダイブした。

新雪のクッションにズボツと人型の穴を開けて落ちたが、行雄は  
そこから立ち上がることはなかった。

夜仕事から帰った父親は（母親はいない）最初行雄がどこか友だ  
ちの所でも遊びに行ったのだらうと思いついて怒っていた。中学3年生で  
はあったが、行雄は地元農協に就職が決まっていた受検勉強の必  
要はなかった。

行雄は10時を回っても帰ってこなかった。玄関のカギも開けつ  
放しで、父親はさすがにおかしいと思い、行雄の行動を考えた。朝  
出かけにまだ布団に潜っている息子に「たまには表の雪かきでもし  
ろ！」と怒鳴った。表の雪はそのままだったが、屋根の雪が無くな  
っていることに気付いた。

父親は慌てて家の周りを調べ、庭で雪に潜って冷たくなった息子  
を発見した。

死んでいた。

即死だっただろう。

何故なら、

行雄の胸から木の枝の折れ口が飛び出していたからだ。

直径5センチもある木の枝が背中から胸に貫通していた。

そこには何も無いはずだった。

しかし、

夜中の大風で向かいの家のイチヨウの枝がボツキリ折れ、ここま  
で飛ばされていたのだ。

更に降り積もった雪に枝は隠され、行雄は気付かず、その真上に  
ダイブしてしまったのだ。

そういう事件だった。

雪の下には何があるか分からない。それは雪国の人間の常識だった。この事件は改めてその危険に警鐘を鳴らすこととなった。

30年後の現在、等々力たちが訪れてみると家の持ち主は縁故のない他人に変わっており、遺族から話を聞くことは出来なかった。まあふざけたオカルト番組の取材ではとても話も聞けないが。

等々力はしよせん嫌らしいテレビマンである。しかもオカルト専門の。

雪の中で胸を串刺しにされて死んだのだ、十分関連づけられるが、更に何か今回の事件につながる面白いネタはないかと近在の者に取材した。

女のネタだ。

週刊誌に掲載された写真には女の霊が映り込んでいたのだ。なんでもいいから女に絡んだネタが欲しかった。

森行雄の周辺の女性というと母親であったが、母親は行雄が小学3年生の時に家を出ている。

不倫をして男の下へ走ったのだという。  
以来行方は誰も知らない。

「というわけなんだよ」

夜ホテルに帰ってきてから等々力は三津木に電話した。

「心霊事件の陰に女あり。やっぱり幽霊は色っぽい女の方がいいよなあ」

『その母親を幽霊にしちまうんですか？』

「うん……、やっぱり無理があるかな？」

電話の向こうで三津木は含み笑いを洩らした。

『リキさん』

三津木は等々力を力リキと呼ぶ。

『うかつだなあ。つらら女って知りませんか？』  
「つららおんなア？ 知らん。雪女と違うのか？」  
『そっちの地元の雪女ですよ』

秋田県に伝わる話。

冬、吹雪の夜。ある若者の家に旅の若い女が宿を求めて来る。若者が泊めてやるが、吹雪は一向に止まず、女は家に泊まり続け、そのまま二人は結婚する。

しかし暖かな春になると、女は突然いなくなってしまう。  
妻がいなくなってしまうので夫はやがて別の女と結婚する。  
しかし冬になると前の女がまたやってくる。女は夫が別の女と結婚しているのを知ると怒って、つららに化身し、男を刺し殺す。

『というのが wikipedia に載ってましたぜ』

「秋田県の話か。そりゃうかつだったな。雪女の話なんてどこもいっしょだと思ってたからな」

『ハハハ。俺ですよ。たまたま、ウィキペディアさまですよ』

「いけるね。バツチリだ。よし、それで行こう！」

『少年の事故死の件も捨てがたいですね』

「やるよ、もちろん！ 制作費、奮発してくれよ？」

『紅倉先生がオーケーしてくれましたからね、プロデューサーも嫌とは言いませんよ』

「紅倉ミキちゃんさままだな」

等々力も紅倉との付き合いは三津木に次いで長い。

「明日山小屋に登ってロケハンしてくるよ」

『だいじょうぶですか？ 天候は？』

「晴れ、ということだ。こっちの人も崩れることはないだろうと言ってたから、心配ないだろう」

『そうですか。とにかく雪山ですから気を付けて。成果、期待しますよ』

翌日朝から等々力たちは遭難した4人と同じルートを登った。「秘湯と美女」シリーズで鍛えた足には楽なゆるい道の日だった。

朝7時に登り始めて10時30分には着いてしまった。

多少雪かきをして扉を開いた。外に開くドアは雪山の山小屋のドアとしては設計ミスだろう。中は何もない3メートル4方の板敷きだ。重い登山靴でドカドカ雪を散らしながら上がる。

メンバーは5人。等々力とカメラマンとAD2人と、捜索に加わった地元の登山家だ。

ゆるい坂を登りながら訊くと、30代の地元の登山家も「つらら女」を知らなかった。口伝えの昔話はメディアに載らないと現代では廃れていく一方だ。

山小屋は見たところ近頃使った形跡はない。もともと立ち寄る人も少ない上、あんな事件があつた後では気味が悪くて入らないだろう。これが都会が近ければかえって若者たちに荒らされるところだろうが。

「ここに衣服が脱がれていたんですね？」

と、さっそく現場検証にかかる。

会社立ち上げ前からの仲間であるベテランカメラマンは等々力の指示を待たずにさっそくカメラを回して小屋の様子を収める。中央に立ち床が入るようにぐるりと一周し、壁を撮して一周する。窓がある。格子が十字にはまった一枚ガラス。上の一辺を軸に下が外に開く造りだ。天井を撮してぐるり。一通り撮し終え、カメラを下ろした。

ふと、カメラマンは何かを見た気がした。構えたカメラを下ろすとき、ファインダーから目を離れたその直前、窓が斜めに写り込んで、その上の隅に・・・

なにか、垂れ下がっていた。

「お、おい・・・社長・・・」

カメラマン＝茂田充（しげたみつる）は緊張した押し殺した声で呼びかけた。

「・・・あ？　なんだ？」

資料に渡された山崎忠男と常盤尚美の写真を見ながら、ここで男と女がああしてこうしてと妄想たくましくしていた等々力は思い出したように頓狂な声を上げた。茂田カメラマンは小声で言う。

「社長。そーっと窓を見てくれないか？」

自分はじいっと壁の下を見つめている。カメラマンの習性でカメラのファインダーさえ覗いていればなんでもどこでも平気でいられるが、ファインダーから目を離れた途端に意気地がなくなる。自分でそれを確かめる勇気がないのだ。

等々力は言われたとおりそー．．．と窓を見た。雪を少し乗せた黒く湿った木の向こうに灰色の雲が広がっているだけだった。

「なんにもねえぞ。何か見たのか？」

等々力はカメラの目を疑わない。時として人間の目では捉えられないものを見てしまうことがあるのだ。

「なんか黒いのがぶら下がっていて．．黒い．．女の髪の毛だったような気がするんだよ．．．．」

等々力は、ニタツと笑った。その時である、

「社長！　雲が、」

外で小屋の写真を撮っていたADの若者が心配そうな声を上げた、次の瞬間、

カッ．．．．

と雷光が走り、

ゴロゴロゴロゴロゴロ．．

と物凄い轟音が大気を震わせ、ガラス窓がビリビリ鳴った。

ゴングゴングゴングと大粒のあられが降ってきたと思ったら、それはすぐに大きな雪の固まりになり、突風と共にあつと言つ間に吹雪になった。

外にいた者たちはたまらず小屋に駆け込み、ドアを閉めた。

「なんだこの急変はあ!？」

と、地元の登山家が一番驚いていた。

「モツちゃん」

等々力は茂田カメラマンをそう呼ぶ。

「カメラ、回しとけよ」

言われるまでもない。茂田カメラマンは勘を頼りに小屋内部の様子を映し続けていた。男が4人、白い息を吐きながら、時たまガサガサジャケットの腕をさすり上げるだけで、じっと固定した姿勢のまま、緊張した面持ちで目だけギョロギョロ動かしている。ファインダーに切り取られた画はさながら映画のワンシーンのようだ。

しばらく待ったが何も変化はない。

「外の画が欲しい」

茂田カメラマンは助手に三脚を出させてカメラを据え、ハンディーを受け取ると窓から外を撮した。窓ガラスを拭ってもすぐに真っ白にくもる。二人がかりでドアを押し開けてもらい、半歩前に出た。開いたドアに気流が変わり、ビュオアアア・・・と甲高い音と共に乱れた風の固まりがぶつかり、引っ張り、茂田カメラマンは腕をもぎ取られそうになって慌てて引っ込んだ。

ドアを閉め、湿気のもった狭い空間が、真っ白い吹雪の中に孤立している。ゴオオオと小屋を揺すぶる低い唸り声の中に時折ヒイイン・・・と女の悲鳴にも似た風のねじれこすれる音が聞こえた。

1時間経ち、2時間経ち、まだ午後の早い時間だというのに夕刻の暗さがずつと続いている。窓枠にたまっていく雪の向こうに外の荒れ狂う吹雪の様子が見えた。さっきまではくもっていて見えなかった。それだけ小屋内部、5人の体温が下がってしまったということだ。

5人が5人とも耐えきれない寒さに震えていた。突っ立っていたのが茂田カメラマンを除いた4人は中央に背中をくっつけてしゃがみ込んでいる。茂田カメラマンだけは隅に三脚のカメラと共に陣取り、特に窓に注意しながら小屋の様子を撮り続けていた。

等々力が歯をカチカチ言わせながら言った。

「こ、こりゃたまらんな。こ、こんな状態で3日も閉じ込められたら、そ、そりゃ、ははは、裸で暖め合おうって気にもなるな」  
「iiiiiiii」

とチーフADの高谷翔（たかやしゅう）、26歳独身がこちらも歯をカチカチさせながら言った。

「いやですよ、しゃしゃしゃ社長と抱き合っなんて、ととと凍死したって、おおお男のプライドがゆゆゆ許しません！」

「ば・馬鹿言ってんじゃないよ」

地元の登山家が唇をこわばらせながら言った。

「こ、このまままた3日も吹雪が続けば、ほ、本当に、し、死ぬぞ！」

「いったい・い今何度くらいなんだ？」

登山家がジャケットの袖をめくり手袋を押し下げ多機能デジタルウォッチで温度を見た。

「マイナス8度！ ば、馬鹿な、ここは北海道じゃねえぞ！」

「山の上でも珍しいんですか？」

「山頂ならまだしも、ここはたかだか4合目だぞ！？ しかもこんなならかな所で、ふつうあり得ん！」

「つ、つまり」

等々力が凍った口をせいぜいニヤつかせて言った。

「こ、こりゃあ、ふつうの自然現象じゃない、超常現象ってことだ！」

へ、へ、へ、と無理やり笑ったが我ながら元気がない。外の吹雪く音はますます激しく、小さな小屋には圧倒的で、皆じいっと押し黙ってしまった。

ブルブル痙攣するように震え続けていた一番若いADの柄田昌樹（つかだまさき）、21歳がか細い声で言った。

「ちきしょー・・・しゃちよー、今度温泉口ケ連れてってくださいよー、オレまだ連れてってもらってないんだからー・・。いいなあ

く、オレもかわいいリポーターの女の子の入浴姿が・・・見たい・・・な・・・あ・・・」

「おいこらあー、柄田あー、寝るなあー、寝たらあー死ぬぞお・・・」揺さぶる等々力の腕も力なく、自分もどうしようもなくまぶたが重かった。高谷もすでに反応がない。

『おいおい、冗談じゃねえぞ』

等々力の腕がだらんと下がり、意識が飛んだ。

気力でファインダーを見続けていた茂田カメラマンも意識はもうろうとして、今にも消え入りそうにしていた。

「・・・え？　なんだって？・・・」

誰かが何か言ったように思ったが、4人とももうピクリとも動かず床に座り込み、

「なんだよ、空耳か・・・」

茂田カメラマンの意識も途絶えた。

風が、鳴り響いている。

「おい！　あんた、しつかりしろ！　目を開ける！」

肩をガクガク揺すぶられて茂田カメラマンはうるさそうに目を開いた。

「おつ。気が付いたか。分かるか？　助かったんだよ！　吹雪が止んだ！」

満面笑み崩れた登山家に肩を叩かれ、反射的に窓を見ると赤い光が滲んでいた。夕焼けだ。次いで慌ててカメラを見た。とつくにテープが切れて止まっている。いったいどこまで撮れているんだろう？　何か写っているのだろうか？・・・

「時刻は・・・」

ドーンと音がしてびっくりした。

「せーの！」

等々力がドアに体当たりしている。

「ドアが凍り付いて開かないんだ。時刻は4時10分。ここは携帯はつながらないんだ。早いところ帰らないとまた搜索騒ぎになっちゃう」

言いながらも登山家はほっとした余裕のある表情で等々力を見て  
いる。

「せーの！」

何度目かの体当たりでドアはバーン！と外に開いた。3分の1くらい開いて雪に押されて止まった。

「いやあよかつたよかつた」

「ほんとあのまま死ぬかと思いましたよ」

等々力に続いて高谷と柄田も元気に雪を蹴散らし外に飛び出た。

茂田も

「バカヤロ。手伝え！」

と笑いながら言つて立ち上がった。

表に出た3人は3メートルほど離れたところで呆気にとられたように突つ立っていた。

「モツちゃん、カメラ！」

等々力に呼ばれて茂田はチツと舌打ちしてハンディーを掴んで外に走った。

「ドアをくぐつた途端

「うおっ」

と思わず声が出た。

つららだ。

あの週刊誌で見た写真の実物がここに生えている。茂田はとにかく3人の立つ位置に走り、振り返りカメラを小屋に向けた。

夕焼けをバツクに黒い魔物の口が開いている。

感度を合わせたファインダーに魔物の口の詳細が浮かび上がる。

濡れた黒い木壁に、地面まで届きそうな1.5メートルもある極太のつららが十数本、屋根から伸びている。まるで巨大な牙のように。

開いたドアによって1本がポツキリ折れて、3つに砕けて雪の地面に散らばっている。雪は70センチほども積もっているだろうか？ 登ってきたときは20センチもなかったから5時間ほどの間に50センチも積もったことになる。

ドアが途中で止まったのは雪のせいばかりでなく、つららに止められたせいでもあった。折れた1本の他にもう2本ドアの上につららが生えている。

「社長、よくあのドアが開きましたね？」

柄田に感心されて等々力はおうと威張ったが、上の空だった。ちなみに等々力は中背で小太りながらプロレスラーのように筋肉質のエネルギーシユな体をしている。

赤と黒のコントラストに冷たく光る牙。折られた1本に魔物が怒っているように禍々しい妖気が立ちのぼっているようだ。

「おい、急いで下ろう！」

登山家に急かされて4人は小屋を発つ準備にかかった。

冬の夕焼けは急速に暗い夜の空に移り変わっていく。

夜、ホテルで、等々力と茂田はその「声」を聞いた。

### 第3章 収録、写真（前書き）

「今年は雪が降らないなあ」と書いたら、いきなりドカッと来ましたね。皆さまもお気を付けて。(08・i・i6)

つららの杭

### 第3章 収録、写真

これはいけるぞ、と三津木は内心ほくそ笑んだ。

等々力組のロケハンから1週間後、早くも東日テレビ第3スタジオにて再来週放送予定の「ほんとうにあった心霊事件ファイル」の収録が行われようとしている。通常2ヶ月に1度の2時間スペシャル番組だが、三津木はさらにまた2週間後の番組枠獲得をプロデューサーに進言していた。編集した取材VTRを見て「これはいけるぞ！」と小躍りして喜んだ。プロデューサーも「紅倉先生なら」と前向きな検討を約束した。

しかし2時間の枠を1つのテーマでやるのは視聴率的に辛い。それに今回はプロローグに過ぎないのだ！ 前半は視聴者から寄せられた心霊写真の検証を男性の霊能師、畔田俊夫（くるだとしお）先生にやってもらい、その最後に例の写真を出して紅倉先生にバトンタッチしてもらう。

「紅倉さんにはかなわんねえ」

和服を着こなす50代の畔田霊能師はメガネの奥の目を柔和に細めて言った。三津木も笑いながら恐縮して頭を下げる。これが岳戸由宇だったらえらい騒ぎだ。

芙蓉美貴も収録前に紅倉先生に言付かった人気の高級洋菓子店のケーキを手みやげに楽屋に挨拶に行った。畔田先生は信頼あるベテランで紅倉先生のずつつと先輩の霊能師だ。

畔田はケーキを受け取って嬉しそうにニコニコした。芙蓉はうつむき気味に

「すみません、本来は紅倉先生ご本人がご挨拶に来るべきなのですが、その・・・先生は人見知りが激しくて・・・」

と苦しい言い訳をした。畔田は「まあまあ」と芙蓉にもお茶を入れ、畳の上に招くとさっそく箱を開け自分の分と芙蓉の分とケーキ

を皿に取った。

「お邪魔します」

芙蓉は断るわけにもいかず靴を脱いで丸テーブルに畔田と向かい合った。畔田に弟子はいない。

「いやあ紅倉先生の差し入れはいつも美味しくて、僕なんかの手の届かない高級品ばかりで、実はね、毎度楽しみにしているんですよ。いただきます」

手を合わせてショートケーキにフォークを入れた。

「うーん……。おいしいーねえー」

畔田は口の中の香りをゆっくり楽しんでニコニコ言った。

「いただきます」

芙蓉もミルフィーユにバリバリツとフォークを刺して口に運んだ。美味しい。

畔田は満足そうにニコニコ芙蓉を眺めて言った。

「紅倉さんは相当わたしが苦手なようだね」

「いえ、そんな・・・」

パイ生地が喉に引っかかって思わず顔をしかめた芙蓉に畔田は茶を勧めた。芙蓉は一口飲み下し、

「いえ、そんな、先生だけを特別敬遠なさっているわけでは・・・」

とまた苦しい言い訳を繰り返した。ちょっと先生が恨めしい。

「ハハハ。まあ、この商売をしている者同士あまり顔を合わせたくないという人も多いけど。でも紅倉君は僕のこと、苦手なんだろう」

「はあ・・・」

と芙蓉はうつむいた。紅倉先生は畔田先生を嫌ってなどいない。名前が出たときにはいつも褒める。紅倉先生が同業者を褒めるのは畔田先生だけだ。

「ま、気持ちは分かるよ。いろいろと、僕に視られたくない物をお持ちなんだろう・・・」

芙蓉は思わず畔田の目を覗き込んだ。先生に何を視るのだろうか？  
「君が現れてくれてよかったよ。紅倉君を守ってあげてください」

畔田は慈父のように優しい目で微笑んだ。

畔田には5枚の心霊写真を視てもらった。

他の心霊番組ではあらかじめ霊能師に写真を渡し、鑑定結果を準備しているが、この番組では生で視てもらった。どうせ収録なので時間がかかったってかまわない。極力生の緊張感が欲しいのだ。霊能師によっては雑念が入るから嫌だという者もいるが、テレビマンの厚かましさを聞く耳を持たない。

3枚の写真は特にどうという物ではなかった。しかし4番目の写真に畔田はひどく深刻な面持ちをした。

まず畔田にオリジナルの写真を渡す。ゲストや観客が見守る中、畔田は鑑定をし、うなずくと、番組が進行する。

司会の女性タレント「天衣喜久子（あまいきくこ）が紹介する。

「次の写真は山形県の青沼みゆきさんから寄せいただきました。この写真は昨年地元の神社で撮った物です。とにかく気味悪く、何か悪いことが起きるのではと不安で仕方ありません。鑑定をよろしく願います。」

ということ、こちらの写真です」

七五三の写真らしく、神社の境内でニコニコ笑った青い袴姿の5歳くらいの子を黒い袴姿の父親が脇を持って大きく掲げ上げ、となりで赤い着物の母親が嬉しそうに微笑んでいるという、目に棒線さえ入っていないければなんとも微笑ましい写真だが・

横長の写真、親子は腿から上のアップで写っていて、背後には何組かのやはり七五三の親子連れが写っている。

「さあ、皆さん、分かりますか？」

天衣に問われ、ゲストのタレントたちは手前の、客席の観客たちはセットの大きなモニターに映し出された写真に見入った。

なかなか気付く者が現れない。

「現物を引き伸ばした写真があります。先生、わたしこれ持つのも

嫌なんですけど・・・」

アシスタントの女の子が持つてきた大判プリントのパネルを天衣が受け取るうとするど客席から「ヒッ」という悲鳴が上がった。

「ね？ やですよねえ」

天衣が身もだえするように言つてパネルを「どうですかあ？」と胸の前に構えて横からゲストたちが身を乗り出して覗き込んだ。

「後ろの人たちの間ですよ」

しばらく見入つて

「わあっ」

と男性タレントが声を上げた。

「うわっ、これ気持ち悪いわあ」

露骨に顔をしかめる。タレントの女の子が「えー？ ヤダヤダ」とかわいこぶる。

「この部分です。拡大した写真を見てもらいましょう」

再びアシスタントに運ばれてきた写真を見てスタジオから「キヤアッ」という悲鳴と不安などよめきが長く尾を引いた。

「いやあ〜ん、なにこれえ〜っ!？」

タレントの女の子も不細工に顔を歪めた。

黒くどろどろした固まりの中に、目が、こちらを見ていた。

赤い着物の母親の肩越し、社殿に向かう2組の親子の後ろ姿が少しずつ重なつてているが、その間に、黒い長い髪をした白い服の女が立っている。全体の姿勢は向こうを向いているのに、後ろ頭に髪の毛をかき分けるように目玉が覗いていた。丸く白目を剥きだした目は、はつきりと、カメラを凝視していた。

何とはなしにまた客席の悲鳴が高くなる。

「先生、これはかなり強烈ですね。えー・・・なんなんでしょう?」

「うむ・・・」

畔田も洗面を作つてパネルの写真を凝視した。

「これは典型的な悪霊の姿です」

その言葉だけでまた悲鳴が上がった。

「これ、目玉ですね。こちらを見ています。きょーれつに、強い悪意を発しています。非常に危険な霊です」

温厚な畔田がここまで言い切るのは珍しい。ブースでモニターを見ていた三津木はしくじったかなと思った。後半への興味をつなぐため強烈な奴を選んだが、畔田先生がここまで言う写真をここで終わらせてしまうのはもったいない。よし、こいつも次回に引っ張ろうと計算した。

天衣が訊く。

「じゃあこの親子が危険ということですか？」

「うん・・・それなんだけれどね・・・」

畔田は洗面で考え込み、言った。

「見ているのはね、この親子じゃないんだ。カメラを覗いているんだね。つまり、この目が見ているのは、」

一拍置いて、

「今この写真を見ている我々なんだよ」

ギャーーツと悲鳴が上がリ、客席で二人、同時にバタバタ倒れた。スタッフが慌てて駆け寄る。スタジオは騒然となり、気絶した二人が担ぎ出され、泣きながらいつしよに歩いていく子もいた。三津木は本当にもつたいたいなことをしたなと思った。いやいや、これは使えるぞ、とこのハプニングを喜んだ。

ふと、三津木はモニターの目玉と目が合ってしまった。さすがに嫌あな気がした。見られているのは自分のような・・・

スタジオが落ち着いて畔田が解説を続ける。

「この目が怖いんだけどね、典型的な悪霊と言ったのは、そもそもこの女性がね、この世の人じゃないんだ」

「この後ろ姿の女性がですか？」

「はい」

観客はもう悲鳴を上げる元気もなく、ただただ青ざめた顔で写真

に見入った。

「紅倉さんがよく言いますね、悪霊というのは単体では大きな力は持たない、集団になって強力な霊力を持つのだ、と。それがこの写真の姿です。一人の女性の幽霊に、別の女性の幽霊が取り憑いているんです」

客席からすすり泣きに似たため息が漏れた。ゲストたちは真剣な面持ちで先生の話の話を聞いている。

「この白い服の女性の霊ですね、これは・・・特に悪意は感じないんですね。とても悲しい、おそらく子どもを亡くした母親の霊でしょう、七五三の楽しい雰囲気ね、我が子との思い出を懐かしんで、ふらふらつとさまよい出てきてしまったんでしょう。」

ところがね。

そこに網を張っていた悪い奴がいたんだね。同じく子どもを亡くした母親の霊だと思うんだけど、これは非常に強い憎しみを抱いている。何かに復讐しようとしていて、自分のパワーを強めるために同じような思いを持った霊を取り込もうとしているんだね。強い思いを持った、特に悪いことを考えている霊はね、強烈なんだ。この女性は、ただ悲しいだけなんだけど、こういう強烈な奴に取り憑かれたら、悲しい思いが、強い憎しみに変質してしまって、こいつの言いなりに仲間になってしまっただね。

この目玉、

こいつは本当に恐ろしい、邪悪な悪霊だよ」

畔田はびっしょり汗をかきながら、顔を蒼白にしていた。こんな畔田を見るのは三津木は初めてだった。

あまりに重い緊張に黙り込んでしまった天衣に代わってベテラン男性タレントが畔田に訊いた。

「それでね、先生。じゃあこの目は、我々の、何を、誰を見ているんですか？」

まさか自分では・・・と、誰もが息を飲んだ。

畔田は額を押さえ、悩ましく首を振った。

「分からん……。見ている物が現れてこないんだよ……。なあ、三津木君」

三津木は飛び上がって驚いた。ベテランの畔田がカメラ越しに直接自分に話しかけてきた！

「なあ三津木君。この写真を放送するのは止そう。こいつは強力すぎて僕の手には負えん。いいかい？こいつは、時空を越えて、今、現在、ここに、居るんだ」

……

「いやしかし、ここには居ないのかもしれない。つまり、これが放送されてしまったら、こいつはテレビを通じて、全国至る所を見て存在し、復讐の相手を見つけてしまってもいいのだよ」

畔田は必死と力説する。

「それだけ、こいつは恐ろしい悪霊なんだよ！」

三津木はスタジオに走った。

「先生。それはつまり、放送してしまったら誰か犠牲者が出るということですか？」

「その通りだよ」

畔田は厳しい顔で断言した。

「僕はテレビタレントじゃない。霊能師なんだ。霊の問題から人を救うのが仕事なんだよ。明らかに悪い結果をもたらす行為を、僕はプロとしても、人道的にも、出来ないよ」

三津木は本格的にまいった。面白いとは思ったが、まさかこれほどの物とは思わなかった。

しかし、天衣がテーブルの上に放り出したパネルを見て思う、

この目は、こんなにはつきりしていただろうか？ 黒目がくつきりして、血走っている。

ゾツとした。

決断を下さなくてはならない。この後に大ネタが控えているのだ、このまま収録を停滞させるわけにはいかない。

「分かりました。この写真は今回保留にしましょう。後で改めて相談させていただきます」

畔田は幾分表情をゆるめて、かえってすまなそうな顔をした。「ではすみませんがもう一枚の写真をお願いできますか？」

「ああ。悪いね」

オリジナルの写真は黒い盆に載せて畔田が持っている。アシスタントの女の子が怖がるので男のADが受け取りに来た。

観客は疲れ切っている。

「皆さん。恐ろしい思いをさせてしまつて申し訳ありません。もう少し頑張ってください。この後紅倉美姫先生が登場なさいますので」

紅倉美姫の人気は絶大だ。観客の女性たちはとなりと顔を見合わせ、仕方ないかと頷き合つた。三津木は畔田に頭を下げた。畔田も笑つてうなずいた。観客からキャツと歓声が上がつた。芙蓉美貴がやってきた。畔田に申し訳なさそうに頭を下げ、

「紅倉先生がこの写真は自分に任せてくれないかとおっしゃっているのですが」

と言つた。先ほどのADが写真を載せた盆を持ったまま困つた顔をしている。

三津木はどうしましよう？と畔田に問うた。畔田は顔を赤くして「では紅倉君を呼びたまえ！」

と芙蓉に強く言つた。芙蓉は三津木に問い、三津木もうなずいた。

芙蓉に手を引かれ紅倉美姫が現れた。その可憐で神秘的な姿に観客たちは歓声を上げたいところだが、スタジオの重い緊張感に遠慮して声が出せなかつた。紅倉は畔田に「いねいに頭を下げた。」

「失礼な勝手を申してすみません」

畔田は顔をこわばらせている。やはり怒りと、心配が、ない交ぜになっている。

「控え室からこれを嗅ぎつけてきたのかね？　そういう真似は岳戸君で十分だ」

「岳戸さんだつたら面白かつたでしょうにねえ」

「笑い事じゃあないよ。分かつているだろう？　これは悪霊なんて言葉でも足りない、これはもはや・・・」

「魔物」

紅倉はうつすら笑みを浮かべた。

「ですわね。ですからわたしに任せていただけませんか？　わたしも、似たような物ですから」

「紅倉君・・・」

紅倉をきつく見つめる畔田の目がじわりと潤んできた。

「いけないよ、そんな風に思っちゃあ・・・」

紅倉はニイツと笑った。

「平気ですよ、わたしは。それに、彼女の捜し物は、わたしの件に  
関係あるようですから」

畔田も驚いた。

「そうなのか？」

「ええ。呼ばれたんですよ、わたしも」

写真の盆は今芙蓉が持っている。紅倉は赤い瞳でジロリと目玉を  
視た。口許の笑みがますます深くなる。

畔田は、ため息をついた。

「分かった。君に任せる。僕は降りる。三津木君、すまんが僕はこ  
こまでにさせてもらおうよ」

畔田はこの場の空気を振り切るようにスタスタセットの裏へ歩いて  
いってしまった。

三津木は紅倉に問うた。

「先生、この写真、放送してしまっていていいんですか？」

「かまわないでしょう。被害者はどうせ身内です」

三津木はギクリとした。自分たちテレビの関係者が標的だとい  
うのか？・・・

紅倉は楽しそうに微笑んで観客と出演者たちに挨拶した。三津木  
は腹をくくった。

つららの杭

「では収録を再開します」

## 第4章 収録、声

『昨年12月初め、秋田県の雪山で一つの遭難事故が起こった』  
ナレーションと共に当時のニュース映像と等々力の取材による取と  
宇美山の映像が流れ、遭難事故のあらましが説明される。

『しかし、これはただの遭難事故とは片付けられない、隠された事実があったのだ』

ジャーソンと効果音と共に画面は色調反転し、赤い血文字で

『雪山伝説殺人事件 血を吸うつらら女!』

と画面いっぱい描かれる。

雪山のVTRとCGの凶解によって山崎忠男の死んで(殺されて)いた状況が説明された。(ただし衣服について、及びそれによって推測される事態は言及されていない)

『そして我々は現地を取材に訪れ、そこで、身も凍る恐ろしい目に遭ったのだ』

『2000X年1月23日』

ナレーションはなく、現地収録の生音で山を登る等々力グループの様子が映される。「こんなの軽い軽い」と冗談を言い合う音声もそのまま入っている。空は真つ青に晴れ上がっている。丸くゆるい斜面に浅く積もった雪にキラキラ太陽が反射し、によきによき生えた樹木の影も青い。

問題の小屋に到着。登山道から少し入り背後と側面をブナの木に守られるように建っている。

小屋に入る。

一通りぐるぐる内部を撮す。カメラが斜めに下ろされ、一瞬窓が映り、真つ黒になる。

ナレーション。

『ご覧になっただろうか？』

もう一度』

斜めに突っ切る窓。

『もう一度、スローで』

ブオブオブオ、とスロー再生された雑音と共に斜めの窓がカタカタカタと左下から右上に移動していく。

キヤーと悲鳴が上がった。

『お分かりになっただろうか？』

ブオブオブオブオ・・と更にスロー。停止。

キヤーキヤーと激しく悲鳴が上がる。

斜めが上がっていく窓。その左上の隅に、黒くビラビラした物が垂れ下がってくる。カメラから外れる寸前、逆さまにこちらを見ている女の顔の半分が現れた。

女の目の、アップ。

「キヤー、キヤー、キヤー」

スタジオに悲鳴が満ちた。観客の若い女性たちは抱き合って涙を流している者もいた。ゲストたちもモニターを見て固まっていた。

青い顔の天衣喜久子が、紅倉の定位置である奥に離れた椅子に向かつて訊いた。

「紅倉先生。これは、やはり幽霊なんでしょうか？」

「はい。これ以上なくはつきりした幽霊ですねえ」

紅倉はニコニコしながら言った。今日の紅倉もどこか変だ。

「女の人ですよね？　どういう人か分かりますか？」

「それはもう、雪女に決まっているじゃないの」

紅倉は朗らかに笑った。

「雪女ですか？　雪女って、幽霊なんですか？」

「さあ？　どうなんでしょうねえ？」

オホホ、ごめんなさい。ちょっと遊びが過ぎますね。はい、まじめにお答えします。

この女性は亡くなっています。つまり生きている人のイタズラや、スタッフのヤラセじゃなくって、生き霊でもなくって、死んだ人の

魂が生前の姿を現したものです。

しかしそれにしてもはつきり写ったものですね。えーと、皆さんにも見えているんですよ？」

紅倉の視力は非常に弱い。明暗の影がおぼろに見えるだけだ。紅倉の見ているものはこの世の姿ではない。

「ちょうど30歳くらいですね。ふうん・・・、亡くなったのも30年くらい前かしら？ もうだいぶ生前の記憶は失われているわね。よく分からないなあ・・・。子どもが一人。女の子。でも母性はあんまり感じないわね。色気の方を強く感じます。まずまず美人、かな？ と、こんなところでどうかしら？」

「なるほど。名前は分かりますか？」

「（ピー）さん」

「亡くなった状況は分かりますか？」

「殺されてるわね」

紅倉のあっさりした言葉にスタジオがざわめいた。

「殺した相手は分かりますか？」

紅倉のもう一つの顔、未解決事件の真相を霊的に透視する俗称「死体捜し屋」。この「ほんとうにあった」シリーズと同じ時間帯を分けるライバル番組「生追跡！真相を探れ」の実績で紅倉は世間に圧倒的な知名度を得たのだ。こちらの「ほんとうにあった」の方が出演は先なのだが。

「女性の夫ですね。就寝中にロープで首を絞められています。その裏切られた怒りと憎しみが、この人をこの世にとどまらせているのね。お気の毒」

スタジオはしーんと静まり返った。

スタジオディレクターの指示で天衣が進行する。

「分かりました。先生には後ほどまた解説をお願いします。

この女性の幽霊に遭遇した取材班ですが、実は、この後さらにとんでもない事態に遭遇するのです。ではVTRを、どうぞ」

『取材班を更なる恐怖が襲う。その瞬間を、ご覧いただけよう』

小屋の内部らしいが隅の暗がり撮しているようでよく分らない。離れた所から「社長！雲が」と叫ぶ声が聞こえ、カメラが構え直され、等々力と登山家の姿と開いたドアから外が見える。途端にピカツと稲光いなびかりがし、すぐにゴロゴロゴロとひび割れた物凄い轟音が長々続いた。あつと言う間に吹雪となり、外の2人が慌てて駆け込んできた。

内部の重苦しい様子。レンズがくもり、何度も拭かれる。

ドアを開けて外の様子を撮ろうと試みられるが、画面がめっちゃくちゃに振り回され、白が激しく乱舞し、すぐに暗い小屋に引込込む。窓から外の吹雪が見える。すさまじい低音と金切り声。

中央に固まって震える男たち。

「マイナス8度！ 馬鹿な、ここは北海道じゃねえぞ！」

「超常現象つてことだ！」

沈黙。暗い画面。

「寝るなあー、寝たらあー死ぬぞお・・・」

一番元気な等々力が沈黙し、もう動く者はいない。

外の嵐の音が吹き荒れている。

吹き荒れている。

吹き荒れている。

・・・・・・・・

「・・・え？ なんだって？・・・ なんだよ、空耳か・・・」

嵐。吹雪。

ゴオオオオ、ビュルルルル・・・

「・・・・・・・・」

ゴオオオオ、ビュルルル、

ゴオオオオ、

ゴオオオオオオオオオオ、

オオオ。

暗転。

スタジオ。

天衣とゲストたちが緊張から解放されてほおー・・・と息をつく。

「これが取材班の遭遇した恐怖の一部始終です」

「なんだあ、お化け出てこなかったじゃない？」

タレントの女の子が軽い笑い声を上げたが、不安そうにキョロキョロした。

「ね？ なんにもなかったですよねえ？ ねえ？」

天衣が息を吸い込みながら言った。

「ところが、今のVTR中に、不可解な音声が入っていたんです」

「え〜、もうやですう〜」

タレントの女の子はとうとうポロポロ涙をこぼし始めた。男性タレントに慰められる。天衣は気にしつつ進行する。

「その音声を確認する前に、そもその事件を今一度確認しましょう。」

山崎忠男さんが亡くなったのは当初事故と知らされていました。

しかし先ほど検証しましたようにとても事故とは思えない状態の死であったことが分かりました。その事件性は現在警察も認めていません。当初警察が事故を示唆する発表をしたのは捜査の都合上であったと推測されます。しかし20名に及ぶ一般の捜索隊が山に入り、内10名近くが山小屋で直接山崎さんの死の状態を目撃し、けっきよく週刊誌の取材でその事実が外に漏れることになりました。

山崎さんの死が単なる遭難事故とは考えづらく、しかし一方、では誰かに殺害されたのかというと、それも不思議な状況であったことは先ほどのVTRの通りです。

では、何が、山崎さんを死に至らしめたのか？

そのヒントになるかもしれない、先ほどの取材VTRの続きがあります。まずはそちらをご覧ください」

VTR。山小屋を脱出して外から撮った画。降り積もった雪と、屋根から伸びる十数本の太いつらら。VTR終了。

「というわけです。先ほど地元の登山家の方が驚いておられたようにこの突然の吹雪は異常な気象現象と言って良く、今ご覧いただいた山小屋の様子は、山崎さんが亡くなったときの山小屋の様子と非常によく似ています。」

では、週刊誌に掲載された問題の写真をご覧いただきましょう。これは捜索隊に加わった一般の登山家の方がこの事故と、異常な気象の記録としてご自分のデジタルカメラで撮影されたものです。こちらです」

出演者たちの座る背後に黒い布に隠されたパネルが運ばれてきて据え付けられた。

「開きますね」

天衣がそーっと下から布をめくっていき、後ろに取り去った。もはやお馴染みの写真だ。客席から小さくキャツとかヒツとか言う悲鳴が上がったが、今日のお客さんはもうすっかり恐怖に麻痺してしまっている。

先ほどのVTRよりもつと雪の降り積もった、しかしそっくりのつららの垂れ下がる山小屋の写真。開いた扉の軸に氷が覆っている。そこに、女が立っている。

「こちらが拡大したものです」

もう一枚パネルが持つてこられ、となりに据えられた。

氷のレンズの向こうに、胸から上の女。黒髪の長い横顔が、足元山崎が仰向けに倒れて雪に埋もれていたであろう辺りを見ている、ように見える。

こちらはカラー写真だが、女の姿は白黒だ。黒髪に白い顔、白い服。

天衣もついブルツと震えた。

先ほど畔田が投げ出した写真。七五三の神社の。あそこに写っていた女の幽霊の後ろ姿は、この女の幽霊の横顔に似ていないか？

これは秋田県。あちらはおとなり山形県の神社のはずだ。しかし取宇美山は両県の境にまたがっている。もしかしてすぐ近くではな

いのか？・・・

いやいや、幽霊なんてみんな似たような姿をしているか・・・

天衣は台本を思い出して進行した。もうかなりめちゃくちゃになっ  
っているが。

「紅倉先生」

皆ハツと紅倉に注目した。

「この写真の鑑定をお願いできますか？」

固唾をのんで注目する。

「亡くなられた方ですね。はい。幽霊です」

「どういう方が分かりますか？」

「VTRに登場した方と同じ方ですね」

一人の幽霊がビデオと写真と両方にはっきり写された例はあまり  
ないのではないか？

「ではこの女性の幽霊はこの山小屋に居着いているということでは  
しょうか？」

「ふうん・・・小屋というより山ですね。小屋は、散歩道の途中  
の別荘ってところかしら？」

「では山中をさまよっている、と？」

「そう思います」

天衣はADの掲げるカンペを見ながらもう一度確認した。

「先ほどと同じということ、30歳くらいで、30年くらい前に  
亡くなっていて、女の子が一人いて、まずまずの美人、と、こうい  
う方ですね？」

「はい」

「分かりました。」

では、皆さん、お待たせしました。

先ほどご覧いただいた、吹雪で山小屋に閉じ込められた撮影隊を  
撮したVTRですが、ここに、こんな不可解な音声録音されてい  
ました。ご覧ください」

VTRの終わり。

中央に固まって動かなくなった4人。

「……………」

「…え？ なんだって？… なんだよ、空耳か…」

嵐。吹雪。

ゴオオオオ、ビュルルルルル…

「……………」

ゴオオオオ。

スタジオ。緊張してモニターに見入っていたタレントのアップ。

天衣。

「お分かりになりましたか？」

「いやあ、分からないなあ…」

「では音量を上げてお聞きいただきます。ちょっと気をつけてくださいね」

中央に固まって動かなくなった4人。吹雪と共にザーと激しい雑音。

「…………オン…………ヨ。」

「…え？ なんだって？… なんだよ、空耳か…」

嵐。吹雪。

ゴオオオオ、ビュルルルルル…

「…………シテヤロウカ」

ゴオオオオ。

スタジオ、不安な緊張感が重く支配している。

「では問題の部分だけ、音声だけでお聞きください」

ザー…………

『あの女ドコヨ？どこに隠したのヨ？』

ザー・・・

悲鳴。天衣が「しっ」と唇に指を立てる。

ザー・・・

『殺シテヤロウカ!』

ザー。

ドスの利いた女の脅し文句にスタジオは今度こそ悲鳴に包まれた。「こわーっ」と男性タレントたちも騒いだ。女の子はすっかり表情が消えてしまっている。

しばし騒然の後、天衣が紅倉に見解を求めた。

「先生。これもやはり?・・・」

「死者の声ですねえ。今回は大当たりですね」

「やはりあの女性の霊の声なんですか?」

「そうです」

姿と声が同時に捉えられることも珍しい。

「『あの女、どこよ? どこに隠したのよ?』と言ってますね?」

誰か、女性を捜しているんですか?」

「そうなんでしょうねえ」

「誰を捜しているか、分かりませんか?」

「うーん・・・」

紅倉はあごに指を当て考えている振りをした。

「よく分かんない」

「そうですか。」

『殺してやるのか』とも言っていますね?

これは・・・捜している女性に対して言っているんでしょうか?

それとも女性を隠している誰か・・・取材スタッフ・・・でしょうか?

を『殺してやる』と言っているんでしょうか?」

「そりゃあ隠しているスタッフでしょうねえ」

紅倉はあはははとあどけなく笑った。完全にこの雰囲気についている。そこが、また不気味だ。紅倉は重い雰囲気なんかには怯まない。どうせ見えない。気にしない。

「ズカズカと自分のテリトリーに踏み込んできて、カメラで自分を追い回して、ものすごく、怒ってるわね。あゝあ、何もなきやいけどお〜？」

紅倉はアハハハと一人で受けている。

三津木はだいたい分かっている。紅倉がこういうふざけた態度を取っているときは、何かを隠しているか、今はまだ言えないことをごまかしているか、どちらかだ。

紅倉はこの女の幽霊の正体に見当が付いているに違いない。

しかしふと思いついた。あの髪の毛の間の目玉は自分たちの関係者の誰かを狙っているという。そもそもあの悪霊とこの雪山の雪女と、何かつながりがあるのか？ いや、そもそも同じ霊なのか！？ 収録は3時間半になるうとしている。かなり切らなければならぬところがあるが、まあなんとかなるだろう。客も出演者ももう限界だ。これはまだプロローグに過ぎないのだ！

三津木は次回の予告がてら紅倉への質問をADに指示した。ADは素早くスケッチブックにメモし、天衣に向けた。

「紅倉先生。最後にお訊きします。

心靈写真コーナーで取り上げた七五三の神社の幽霊と、今の雪山の幽霊と、ひょっとして同じ幽霊なのでしょうか？ いかがでしょう？」

「ふうーん・・・」

紅倉は今度はこめかみに指を当て、考え込むポーズを取り、ニンマリ笑った。

「似てるわよねー。でも、どうなのかしら？ うふふふふふ」

天衣に指示が示される。

「ありがとうございます。謎めいた紅倉美姫先生のお言葉でしたが、先生には引き続きこの謎の解明をお願いします。」

この謎は、次回に続きます」

ハイ、カットー。お疲れさまでした。以上で今日の収録はお終いです。皆さま、ありがとうございましたー。

スタジオディレクターの声で収録は終わった。みんな本当に疲れ切り、観客たちはA Dの案内で無言でスタジオを後にした。

1週間後の放送では、スタジオで収録されたVTRの後に再現ドラマの一部を交えた次回2週間後の番組の予告が流された。

再現ドラマは2本作られていた。

1本は秋田地方に伝わる「つらら女」の昔話のドラマ。

1本は30年前に起きた雪下ろしの屋根からダイビングした中学生の死亡事故の再現ドラマだ。

## 第5章 確認

「先生。いったいどういう風の吹き回しです？」  
「何が？」

「今回の事件です。最初はゼーんぜんやる気がなかったくせに、急にやる気満々になって、こうしてわざわざお出かけになるなんて」

あの収録の翌日、紅倉は芙蓉の運転する車で遭難事故の生き残り常磐尚美を訪ねた。常磐尚美は退院はしたものの、ショックが大きく、大学を休学して埼玉の実家に帰っている。現在そこへ向かう車中である。

「どうしてなんです？」

芙蓉に問われて紅倉は「べつにい〜」とふてくされたように言った。芙蓉はチャリとルームミラーに後部座席の紅倉を見た。ちよこんとお人形のようにお行儀よく腿の上に手を揃えて前を向いている。クラシックのCDが流れている。ピアノ五重奏曲「ます」。シューベルトだ。先生はシューベルトとシューマンの室内楽がお好みだ。「たんたんたんたんたんたんたん」

第4楽章、副題のゆえんである歌曲「ます」のメロディーをいっしょに口ずさんだ。芙蓉は微笑んだ。

歌い終わると紅倉はポツリと言った。

「放っておきやよかったのよ。女の争いは醜いわ・・・」

芙蓉はまたチャリとルームミラーを見た。

「じゃあどうして？」

紅倉は不機嫌にふうと息をついた。

「わたしには死者の方がよく見えるけれど、でも、やっぱり、生きている人間の方が大切だわ」

芙蓉は嬉しく微笑んで言った。

「わたしは先生が大好きですよ」

「うん。ありがとう」

紅倉は下を向くと少女のように嬉しそうに笑った。

埼玉県S市の常磐家に着いた。外に出ると近くの工場から溶けたゴムの臭いが広がってきていた。芙蓉は思わず顔をしかめてしまったが、紅倉は平気そうだった。

呼び鈴を押すと母親が神経質な顔を覗かせた。木曜日。父親は会社に行っていて、おかげで駐車場に車を置けた。

「どうぞ、お入りください」

母親はあまり乗り気でない様子で招き入れた。昨夜芙蓉が電話で訪問の許可をもらった。テレビの取材ではないということを受け入れてもらった。何しろ娘は殺人犯の疑いを持たれているのだ。娘が休学しているのは事故そのもののショックばかりではない。

和室の応接間に通されたが、

「すみません、椅子に座れるお部屋がありますが・・・」

と紅倉は頼んだ。紅倉は正座が大の苦手なのだ。正座すると、そのまま立てなくなってしまう。

尚美が階段を下りてきて言った。

「2階に来てくれますか？ わたしの部屋に」

紅倉はニッコリ微笑み、二人に続いて母親も階段を上がろうとすると尚美は

「ごめん。お母さんは待つてて」

と上に上げなかった。

紅倉は予想通りつまずいて芙蓉に支えられた。

尚美の部屋は6帖の板敷きで、机とベッドがあつて、

「すみません、そこにどうぞ」

と尚美は二人にベッドを示し、自分は学習机の椅子に座った。

「おじやまします」

紅倉は芙蓉と仲良く並んで座り、ニコニコと部屋を見渡した。

「居心地のいいお部屋ね。ごめんなさいね、わたしみたいなのが入

「っちゃって」

尚美の部屋にはポプリの甘く爽やかな香りがほのかに匂っていたが、紅倉の強烈なバラの香水で台無しだ。

尚美の部屋はオレンジを中心に暖色系の色でコーディネートされ、いかにも女の子の部屋らしく物が整理されていた。

尚美は紅倉を見て、笑った。思ったより血色も良く元気そうだった。

「わたし、霊とかあの世とかぜんぜん信じない方だったんです。くだらないって馬鹿にしてたんですよ」

紅倉もニコニコ笑って言った。

「それが、信じたくなかった？」

尚美の顔から笑みが消え、急速に母親に似た神経質な猜疑さいぎの色が目に宿った。

「だって・・・」

「そうとでも思わなければ、自分の精神が壊れてしまう？」

尚美は紅倉を信じていいものかどうか迷っている。

「あなたは自分が山崎さんを殺したと思ってる？」

「分かりません。覚えてないんです。でも・・・」

「自分でも殺してしまったかもしれないって思っているわけね？」

「・・・」

尚美はきつく眉根を寄せて溢れてくる不安と闘った。

「・・・分かりません・・・。本当に、分からないんです・・・」

尚美は辛そうにぎゅうつと拳を握りしめた。紅倉は静かに眺めて

言った。

「山崎さんを殺したのはあなたではありません。雪男です」

「は？」

「は？」と芙蓉も思わず紅倉の顔をまじまじと見た。ふざけて・・・なののか？

「あなた、美人でしょう？」

「どう？」と紅倉に訊かれて、芙蓉は尚美を見て「ええ」とうなずい

た。尚美は渋い顔をした。このスーパーモデル並の美人と人間離れた超美人に「美人」と言われても全然真実みが感じられない。

紅倉は「はあー・・・」とため息をついて、

「もてないのよ、わたしたち。ねえー？」

と同意を求め、芙蓉も真顔で「はい」と答えた。芙蓉の場合男子先生が好きだ。

「だからね、雪男が嫉妬して山崎さんを殺してしまったのよ」

「はあ・・・」

こんな馬鹿げた説明で納得する人間はいない。やはりふざけているのかと疑いの眼差しを向ける尚美に紅倉は心外そうに「ほんとうなのに」と言った。

「ま、それは番組を楽しみにしてもらおうにして、

尚美さん。

あなたにお話ししてほしいの。

あなたは、山崎さんが好きだった？」

尚美の顔から疑いがふと解けて、切ない感情が溢れてきた。

「はい・・・好きでした・・・」

顔を歪め、涙がにじんできて、顔を逸らして鼻をすすり、うつむき、顔を上げると目が真っ赤になってぼろぼろ涙がこぼれてきた。

「そう・・・」

紅倉は優しく言った。

「うらやましいわね。そんな風に人が愛せて。知り合ったのは、いつ？」

「春です。叔父さん叔母さんの紹介で。おじさんの大学の同じ山岳部の後輩で、いい奴だぞ、って。ああ、おじさんと同じ会社に勤めていたんです。すぐく目をかけてみたいで・・・おじさんも、おばさんも、すごくいい人で、わたしをすごくかわいがってくれたのに・・・」

「ふん・・・。付き合いはあったわけね。うーん、立ち入ったことを訊くけれど・・・あなたと山崎さんのお付き合いはどの程度だった

たの？ そのー・・・、恋人？」

「80パーセントくらい」

尚美は嬉しそうに、寂しく、笑った。

「最後の踏ん切りがつかないっていうか、・・・忠男さん、すごくまじめな人だったから」

「なるほど。分かりました」

紅倉は珍しく頬を染めてパチンと手を合わせた。

「以上です。知りたかったことは確認させていただきました」

紅倉はス、と立ち上がった。芙蓉も続く。

「ありがとうございます。尚美さん。山崎さんの敵はわたしが必ず討ちます。番組、楽しみにしててくださいね」

珍しく少女チックだった紅倉が、玄関を出ると途端に冷静な顔に戻って芙蓉に言った。

「美貴ちゃん。あなたもあいう恋愛に憧れないの？」

芙蓉はむっつり口を尖らせて言った。

「大きなお世話です」

「美貴ちゃん」

「なんです？」

「かわいいわよ」

「・・・・・・・・」

紅倉はアハハハと軽快に笑った。

「帰りましょう。そして行きましょう、決戦の場へ」

次の収録はそれから9日後、「ほんとうにあった心霊事件ファイナル／戦慄！最凶悪霊女の姿をついに撮した！スペシャル」放送の翌々日のことだった。

その前に。

「はあん？ ふざけたこと言っただけじゃないわよ！」  
怒鳴りつけられて三津木はげんなりした。

黒の、ハリウッドスターのパーティーにでも出席するようなきわどいカットのドレスを肌張り付けた、派手な顔立ちの女。

霊能師、岳戸由宇Ⅱがくとゆう。

芙蓉言つところの自称紅倉美姫のライバルである。

「なんでわたしが、あの、死体袋といっしょに番組やらなきやならないのよっ！！」

ひどい言い方だが、もちろん紅倉美姫を呼称している。

「だいたいなんで先にわたしの所に持ってこなかったのよ、あんな美味しい話！？」

水曜夜11時。7時から8時54分まで「ほんとうにあった心霊事件ファイル」を放送していた。

「頼むよお、な？」

三津木はあやすように言っただけで手を合わせた。

「紅倉美姫が是非お願いしますって頼んでるんだぜ？ 恩を売ってけよ」

三津木の馴れ馴れしい口調に岳戸はジロリと睨んだ。赤ワインのグラスをテーブルに置くとツカツカ歩いてきて、歩いてきて、すぐ真下から三津木の目を見つめた。

「俊作さんはどうなのよお？」

ワインまじりの甘酸っぱい息。真冬だというのにこんなに肌を露出した薄いドレスを着て、部屋はムンムンと暖房がたかれ、オゾン層破壊の権化みたいな女だ。背広姿の三津木は熱さにじっとり汗をかき、そもそも岳戸も露出した肩をしっとり湿らせ、官能的な匂いを立ちのぼらせている。

三津木はゴクリと喉を鳴らした。まだこの女にそそられる・・・。

「あなたも頼みなさいよ、わたしに！」

「ああ、頼むよ、ゆう・・・」

由宇は三津木の首に腕を回して引き寄せ、唇を重ねた。

ここはテレビ局からほど近いホテルの一室。二人の密会の定宿だ。都会の夜景をバックに、三津木は由宇を抱きしめた。

二人は愛人同士だ。お互い独身なので恋人同士と言ってもいいのだろうが、三津木の相手は由宇一人だが、由宇のお相手は三津木一人ではない、らしい……。

岳戸は長いキスに満足すると妖艶な笑みを見せた。

28歳。元テレビタレント。

彼女を「霊能師」にしてしまったのは、三津木だ……。

「フツ、フフフフ。あの女がわたしに『お願いします』ね？ フフフフ、そうね、愉快だね。アハハハハハ」

岳戸は毒のある高笑いを上げた。

取りあえず、出演は取り付けた。紅倉の依頼通りに……。

そして収録が始まった。

## 第6章 解題「つらら女」「雪女」

番組はいきなり再現ドラマから始まる。

『30年前』

中学生が屋根の雪下ろしをしていて、思いつきで屋根から庭に積もった雪のマットに背中からダイブして、

グサツ。

「うっ」

とつめく横顔。

大きく見開かれた両目が信じられないといった表情で空を見つめている。カメラがズームアウトしていくと、少年の全身が映り、その胸には下から木の枝の切り口が突き抜けている。

周囲の雪に広がっていく真っ赤な血……。

『30年前の悲惨な事故である』

「悪霊よ！」

その声にブースの三津木は手で額を覆いゴシゴシとこすった。さつそく始めやがった……。

「これは単なる事故じゃないわ！ 悪霊の仕業よ！！」

岳戸がモニターに指を突きつけ勝ち誇ったように言い放った。

「屋根の上に女の姿が見えるわ！ その女が、少年の心を操り、突き落としたのよ！ 鋭く尖った、杭の上に！」

えー……あのー……と天衣喜久子は困っている。そこへ「そうですね！ その通りなんです！」

と後ろから声が飛んできた。セットの左奥に一段高く、専用の席に座る紅倉美姫である。背後に守るように芙蓉が立っている。紅倉が岳戸に負けない高い声で言う。

「さすが岳戸先生ですわ！ この事故は恐ろしい女の悪霊の仕業なのですわ！ ね？ 岳戸先生？」

「そ、そうよ・・・」

岳戸は調子を狂わされて席に落ち着いた。紅倉はニコツと天衣に笑いかけた。

「はい。皆さんこんばんは。『ほんとうにあつた心霊事件ファイル』。今夜は前回の放送でたいへんな反響を巻き起こしました雪山の最凶女の悪霊、その解決編をお送りします。」

紅倉美姫先生です。

先生、今夜、あの雪山の事件が、解決する・・・んですよ？」

「はい。解決します。心強い助っ人も来てくださっていますのでね」

「はい、そうなんです。今夜は、いつも心霊事件の鑑定をしてくださっている美人霊能師の岳戸由宇先生がこちらのゲスト席に来てくださっています。岳戸由宇先生。よろしくお願いします」

「はい。よろしく」

美人、霊能師と紹介されて機嫌がいい。

メインのテーブルには左から、司会の天衣喜久子、レギュラーのベテラン男性タレント、中堅男性タレント、前回から引き続きの早くも青い顔で固まっているタレントの女の子、そして岳戸由宇がついている。岳戸は相変わらず露出の多い黒のドレスに、さすがに肩にシヨールを巻いている。メイクも相変わらず濃い。

客席も異様だ。いつもは若い女性ばかりで華やぐひな壇が、今日はむさ苦しい若い男ばかりで占められている。みんなどこかある種の似通った雰囲気を持っている。

「それではさっそく・・・」

天衣は紅倉にニコツとされて岳戸に話を振った。

「岳戸先生。今のVTRで何か気付いたことはありますか？」

「ええ。これは事故じゃないわ。悪霊による、殺人よ。しかもただの怨霊じゃないわ。人の心を惑わし、雪という自然を操る、恐ろしい力を持った悪霊よ」

「そうなんです」

と横から口を挟まれて岳戸はムツとした。紅倉が平気で続ける。

「今回わたしたちが相手にするのはただの幽霊じゃありません。雪女。つまり、自然を操る力を持った妖怪です」

「妖怪！ですか？」

「はい。たしかに霊も空気の温度を変えたり水の流れを変えたりといった自然を操ることをしますが、風を起こし、雲を呼び、雪を降らせ、吹雪を起こすような、そんな強力に自然を操るような力はありません。これは、自然の霊力と結びついた、妖怪にしかできないことです」

「・・・なるほど・・・。じゃあ本当に本物の雪女なんですか？」

「はい。恐ろしい敵です。岳戸先生、よろしくお願いしますね。頼りにしてますよ？」

「え、ええ・・・」

紅倉に微笑みかけられて岳戸はゾツとしながらうなずいた。

「はい。それでは次のVTR行きましょう。」

皆さん、雪女の昔話をご存じですよ？ しかし、事件の起こった秋田県には、こんな雪女の伝説が残っているんです」

『むかしむかし』

時代劇のセットで俳優たちによって秋田県版雪女「つらら女」の伝説が演じられる。

『冬の吹雪の夜』

「ごめんください、ごめんください」

息も絶え絶えといった感じで粗末な家の戸が叩かれる。土間でわら仕事をしていた若者が戸を開ける。すると雪をかぶった若い(?)女が見るからに寒そうに立っている。やり過ぎなくらい目の下に青いファンデーションを塗った顔に溢れる情感で男と見つめ合う女。

演じるは毎度お馴染み、等々力組御用達の幽霊女優、絹引響子きぬびききょうこである。

「旅の途中で吹雪に遭い難渋しております。どうか、一夜の宿をお願いいたします」

「おお、そりゃあたいへんだ。ささ、入りなせえ」

吹雪から守るように肩を抱いて女を招き入れる男。ささ、とそのまま囲炉裏の火に当たらせる。女は寒そうに手をかざし、人心地つくど気付いたように男と顔を見合わせる。男の手は女の白い着物の肩を抱いたまま。二人の見つめ合う瞳にチラチラ囲炉裏の炎が燃える。

『吹雪は何日も止まず、女は若者の家に泊まり続け、いつしか二人は愛し合うようになり、結婚の約束を交わすのだった』

「オレといっしょになってくれ」

「ああ、嬉しい・・・」

抱き合う二人。笑み崩れる絹引響子。囲炉裏の火にパン、二人のもつれ合う足、ピントがぼやけていく・・・。

『幸せな結婚を誓い合った二人。しかし、雪が溶ける春になると』

「おい、ゆき。ゆき。おい、どこだー？」

女を捜して回る男。

「おい、ゆき。おい！ ゆきー！ どこ行っちゃったあー？ ゆきいっつー！！」

『女は、突然、いずこともなく消えてしまった。それからその年の内に男は別の女と結婚し夫婦となった。そして、また年も押し迫った冬の夜』

土間で仲良くわら仕事をしている夫婦。トントン、トントン、と戸が叩かれる。

「おまえ様、開けてくださいませ。わたくしでございます、あなたの妻でございます」

驚き妻と顔を見合わせながらも立ち上がり戸を開ける夫。

戸が開くと、雪をかぶりながらも笑顔の女が立っている。

「ああ、おまえさま。ゆきでございます。あなたの妻でございます」  
呆氣にとられ、やがて顔を怒らせる男。

「ゆき！ おまえ今までどこに行ってたんだ！？ ええーい、おまえなどオレの女房なものか！ オレはもうこの女と夫婦になったの

だ！ おまえのような不義な女、どこへでも行きやがれ！」

土間で不安そうにことの成り行きを見守る新妻を見てシヨックに  
よろめき、戸の外へよろめき出る絹引響子。ゴオオオー・・・と吹雪  
き、その姿が暗く影になる。雪が吹き込んできて手で顔をかばう男。  
「よくも・・・よくも・・・裏切ったなあああ」

ギリリと鬼女の目が光り、スーッとその姿が（CGで）巨大な1  
本のつららに変身する。驚く男。ゴオツと雪が吹き込んできて、  
グサツ。

つららが飛んできて男の胸に突き刺さる。勢いのまま土間に倒れ  
る男。口からブクブク濃い赤い液体を溢れさせる。

「キヤーキヤー」

悲鳴を上げる新妻。吹き込んでくる雪が男の体を覆っていき、男  
の体から流れ出した血が赤く染め、更にその上から雪が降り積もっ  
ていく。新妻の悲鳴が響く。

「キヤー、キヤー、キヤー」

スタジオ。見入っていたタレントたちのアップ。天衣喜久子。

「ということなんです。秋田県に伝わる雪女の伝説、その名も『つ  
らら女』。」

本当につらら女っていたんですねー」

「つらら女。あのつららすごかつたねえ。へんくしん！みたいな」

中堅タレントが一生懸命笑いを取るうとするが、今日の客は乗り  
が悪い。天衣が無視して岳戸に訊く。

「岳戸先生、今の伝説は？」

「なに？ 何を答えればいいわけ？」

その時、突然スタジオの照明がブルーに変わり、白いスポットラ  
イトがセットの向かって右を照らし出すと、ドライアイスのスモー  
クをまとって白い着物の雪女が現れた。

「うわっ」「きゃー」とタレントたちが騒ぐ。いつものお客さんな  
らいいリアクションをしてくれるところなのだが・・・。

盛り上がらないまま照明が元に戻る。

「はい、つらら女さんです。えー・・・、すみません、ちょっとそこに立っててください」

天衣喜久子が言うとうとうやく客席から野太い笑い声が漏れた。せっかく気合いの入ったメイクをしてきたつらら女の絹引響子は美人タレントのお愛想に笑われただけでセットの左の隅、紅倉の特別席の斜め前にただ立った。紅倉はニコニコしてちょこんと首を傾けた。「だから、わたしに何期待してんのよ？」

まだブーたれている岳戸に、天衣は救いを求めるように紅倉を見た。

紅倉はニコニコして話した。

「ほんと、つらら女って本当にいるんですねー。びっくりしました。でも全国的にはやっぱり雪女がポピュラーですよ。それでちょっと調べてもらったら雪女も若い美人と怖い鬼婆あとに大別されるようです。つらら女は若い美人タイプですね。」

ところで夏の風物詩のあの稲 淳二さんのお説によると雪女は昔の雪国の厳しい生活環境から生まれた女性たちの悲しい物語がルーツにあるそうなんですな。

つまり、雪国には美味しい酒どころが多くあります。お酒造りは冬の仕込みの時期がもつとも大切です。その酒造りに呼ばれてやってきた杜氏（とうじ）ら職人たちと、農閑期で職がなく、彼ら相手の夜の仕事に集まってきた近隣の農家の女たちとの刹那的な恋物語ですね。

まあ、昔話ですから、ルーツはともかく、広く全国で語られているお話はあくまで当時のエンターテイメントであり、口から口へ、語り手によって面白可笑しく脚色され、改作されていったのだろうと思われまます。ですから今残っているお話をそのまま実際あった出来事に当てはめて説明するのはそもそも無理があると思うんですけ

れど、ま、わたしも稲 さんに倣ってこの物語を事件の実録物風に脚色してみました。

まず「つらら女」。

これは「雪女」に比べると分かり易いストレートなお話ですね。

まず冬の夜に若い女が現れます。

女は若い独身男の家にずうっと住み着きます。

二人は夫婦の生活を送ります。

しかし春が来た途端、女はいずれともなく姿を消してしまいます。女がいなくなって男は別の女と結婚してしまいます。

ところが次の冬になるとまた前の女が舞い戻ってきて、自分が勝手に出ていったくせに男が別の女と暮らしているのを見ると嫉妬に狂って男を刺し殺してしまいます。

女の行動が不可解で矛盾があるようですが、女の立場を考えれば実にスッキリと分かります。

女は冬の農閑期で仕事がなく、よその町か村に働きに来ていた娘なのでしょね。

女はそこで若い男と懇意になり、同棲し、きつと結婚の約束をしたのでしょね。

しかし春になり農家の仕事が忙しくなると娘は村に呼び戻されてしまふ。

娘は泣く泣くまた冬の再会の約束をして村に帰っていく。しかし。

現実的によその村から通ってきたどこの誰とも知れない、いえ、知っていても敢えて知らない振りをする、そんな娘に対する世間の風当たりは強かったでしょう。

男は娘と約束をしたものの、けっきょく周りのそんな冷たい圧力に屈し、自分でも心変わりがあつたのか、他の娘と結婚してしまふ。

冬になり、恋しい男との再会を心待ちに帰ってきた娘は、男の心変わりを知り、恨み、嫉妬し、絶望し、男を冷たい刃やいばで刺し殺してしまう。

いえ、もしかして本当につららを男の胸に突き立てたのかもしれないね。それで人が死ぬとは思えませんが。きつとその娘は泣きながら男の家を走り去ったのでしょね、吹雪の中へ・・・。

以上、わたしの作り話ですよ。でも、実際に似たような話があったのかもしれないね。ああ、かわいそうに。

さて次にポピュラーな「雪女」です。

ポピュラーですが、これはつらら女以上に複雑で分かりづらい物語です。

舞台はまず雪山です。

吹雪に遭難した父親とまだ若い息子が山小屋に避難します。

二人は交代で火の番をしながら、息子の番になって父親は決して火を絶やすなと言って眠ります。息子は言いつけ通り火の番をしています。疲れについウトウトして火を絶やしてしまいます。

するといつの間にやら戸が開いていて、白い着物の女が父親の上にかがみ込み、冷たい息を吹きかけて父親を凍らせてしまいます。

女は息子にも迫ってきますが、「おまえはまだ若いから見逃してやろう。けれどここであつたことはけつして誰にも口外してはならないぞ」と言つて吹雪の中へ去つていきます。

朝になって吹雪は止みますが、父親は凍死しています。それから数年後。

息子は立派に成人しています。するとそこへある冬の夜旅の女が一夜の宿を求めて訪ねてきます。若者は快く招き入れ、吹雪が止まぬため女は若者の家に居続けます。

やがて二人は結婚し、子どもが生まれます。

幸せな結婚生活。

しかしある冬の夜、針仕事をする妻の横顔を見て男はつい「おまえの横顔はあの夜に見た雪女にそっくりだ」と言ってしまう。すると妻は雪女の正体を現し、「子どもがいるからおまえは殺さない。しかしわたしはもうおまえの妻ではいられない」と吹雪の中山へ帰っていくのでした。

というお話ですね。全国にあるお話ですから地域によっていろいろなバリエーションがあるでしょうけれど。

さて、いくつか疑問点がありますね。

まず、何故雪女は男たちを凍死させるのでしょうか？ 見逃しますが、当初は若い息子の方も殺してしまうつもりだったようです。そして、何故雪女は年を取らないのでしょうか？ 年数はまちまちですけれど、たいてい雪女は若い姿のまま年を取らず、それを夫や周りの者に不審がられています。

さて、この問題をどう解きましょう？

つらら女同様、雪女の正体も農閑期によそから働きに来ていた娘としましょう。

雪山が舞台なのは何故でしょう？ これも稲 説に沿って山里の造り酒屋が実際の舞台であったとしましょう。

すると父親の職業は酒造りの職人となりそうですが、はっきりと木こりで、息子共々獵に出ていたとするバージョンがあります。

舞台は酒造りの山里。しかし父親は酒造りの職人ではないとしましょう。

もう一点気になるのは、このバージョンの雪女には男の母親が登場しません。逆に年老いた夫婦の家に雪女がやってくると、親切に風呂に入れられて溶けてしまうのです。

母親がいない父親と息子。そうしましょう。

さて、これも稲 説によると各酒蔵は、優秀な杜氏〓職人たちのリーダーですね、これを自分の蔵に雇うため、いろいろとサーヴィスをしたというのですね。そのサーヴィスを担わされたのが、集められた女たちです。当然、夜のサーヴィスも含まれるでしょう。はつきり「雪女郎」と言う地域もあります。

どういう女たちが集められたのか分かりませんが、中には、年端もいかない若い娘もいたのかもしれませんが。

そんな若い娘が、ごつい男たちの慰み者にされようとしたら、どうでしょう？

泣く泣く相手をさせられた娘もいたでしょうが、中には、耐えられずに逃げ出した娘もいたかもしれません。

彼女の逃げる先はどこでしょう？

ふつうの道ではすぐに連れ戻されてしまいます。彼女は、決死の覚悟で山に逃げ込んだのではないのでしょうか？

しかし舞台は吹雪です。若い娘が、おそらく薄い着物姿で、雪山を越せるとは思えません。どうせ死ぬ覚悟で逃げ出したでしょうが、娘はそこで1軒の木こり小屋を見つけしてしまう。中は暗く、誰もいないと思われた。この時息子が火を絶やしてしまっていましたからね。娘は助かるかもしれないと小屋に入ってしまった。

しかしそこには先客がいた。

娘は、どうしたのでしょうかねえ……

慌てて逃げようとしたのでしょうか？ それとも自分も仲間に入れて休ませてくださいと頼んだのでしょうか？

しかし、年若い息子が目を覚ましたとき、女は父親に覆い被さるようにして、父親は見る見る冷たく凍り付いていつてしまったのです。

いったい何が起こったのでしょうか？

息子が寝入っている間に二人の身の上に何が起こったのか？

娘は、おそらく、父親に乱暴されてしまったのでしょうか？

妻はおそらく亡くなっています。木こりという職業がそう儲かるとも思えません。父親は酒蔵の杜氏たちをうらやましく、ねたましく思っていたのではないか？ その娘は明らかにそこに雇われた娘です。自分がつまみ食いして楽しんだってかまわないだろう・・・と、そんなところですか？

で、そんなふらち者には天罰観面（てんばつてきめん）、父親はあっけなく急死します。極寒の中興奮して、頭が心臓をやられたのでしょうか。自業自得ですからどうでもいいのですが・・・

気配に目を覚ました息子は父親にのしかかる女と、見る見る凍り付くように硬直していく父親を見て恐怖に駆られます。この息子は・ずうつと若かったのではないのでしょうか？ 娘が殺すのをためらうくらい・・・。息子にしても二人が何をしているのか、理解できなかったのでしょうか。雪の化け物が父親を殺した。そう思ってたただただ震えていたのです。

娘は自分の恥を息子にきつく口止めします。恥ずかしさと怒りで「もししゃべったら殺してやる！」と。息子も恐ろしさで承知します。娘は吹雪の中へ出ていくのですが、おそらく小屋に置いてあった蓑や笠を拝借して、なんとか山を越えていったのでしょうか。

そして数年後。

息子は若者に成長しています。この時点で若者は周囲に家のある里に家を構えて住んでいます。もともと木こりの息子ですが、幼い子どもが一人で山で暮らすことはできないでしょう。父親の死後里に下りてどこかの家にもらわれたのでしょうか。しかし孤児ですから、特に昔の社会においては肩身が狭く、自分の家を構えるのも遅れ、嫁を取るなど考えられず、婚期をとくに逃してしまっていたのではないのでしょうか？

そこへ、旅の娘が流れてくるのです。娘の現れる時期は特に冬とは決まっていません。娘は旅をしていたのであって、つらら女のように農閑期によそに働きに出たのではありません。

若者は娘を家に留め置き、嫁にします。

二人の間には子どもが生まれ・話によっては10人もの子沢山になります。

数年が平和に過ぎます。

しかしここで周囲の余計な茶々が入ります。「おまえのころの嫁はいつまでも若くて綺麗なままだな？」と。

物語では何年も若いまま年を取らないということになっていますが、本当に年を取らなければそれは人間ではありません、妖怪です。今は現実の事件を夢想しているのです。

何年経つても若くて綺麗ということは、逆算すれば若者の嫁になったのはずいぶん若い、まだ子どもの頃ということになりませんか？そしてクライマックス、悲劇が訪れます。

冬の夜、「これは冬の夜と決まっています、囲炉裏端で針仕事をしている妻の横顔を見て夫は言っていました、「おまえはオレが子どもの頃出会った雪女とそっくりだな」と。

もう分かるでしょう、

ここから先を話すのは気が重いのですが・・・、どうせわたしの作り話です。

妻に問われるまま夫はあの夜の出来事を話してしまいます。話をする内、話を聞く内、二人は気付いてしまつのです、自分たちが何者であるかを。

娘は、母親に瓜二つなのです。

娘がまだ子どもでありながら村を追い出されて旅に出なければならなかった理由、それは、自分が母親がどこの誰とも知れない男に乱暴された挙げ句に生まれた子どもだったからです。

その後母親がどういう生活をしてきたか、物語から伺い知ることができません。しかし母親は話してしまったのでしよう、娘の誕生の秘密を。閉鎖的な村の中で周りの者からもずいぶんいじめられたのでしょね。

そして娘は出会ってしまったのです、自分の父親の息子と。

娘は、気も狂わんばかりだったでしょう。

「このような畜生道に陥ってしまったからにはおまえ様も殺さなければならぬ。しかし子どもたちのことを考えればそれは出来ぬ。せめて子どもたちは幸せにしてくださいませ」

そう言い残して吹雪の中へ出ていくのです。

その後娘がどうなってしまったのか、分かりません。

しかし、哀れと言うほかありませんね・・・」

「ちよつと悪趣味だったかしら？ もちろんぜーんぶ、わたしの想像の作り話ですよ」と紅倉は笑ったが、スタジオはそれこそ凍り付いたようにしーん・・・と静まり返っていた。

「さて、つと。では本題、現代の雪女の話をしてしましようか。

こっちはそれほど陰惨な話ではありませんよ。

しかし、人間の恐ろしさには変わりありませんが・・・」

紅倉が、再び話し出す。

## 第7章 解決「つらら殺人事件」

紅倉が再び話し出す。

「『つらら女』の話が他の雪女の話と違うのは二人の女が登場する点が大きいです。

前妻と後妻ですね。

一人の男を巡る二人の女の三角関係の物語でもあります。

今回の事件は基本的にその二人の女の争いが原因になっているのです。

ところが複雑なのは、ここにもう一つの要素が加わってくるのです。

『つらら女』には子どもは登場しませんが、ここには登場します。30年前に亡くなった中学生の男の子です。

この事故、岳戸先生がおっしゃいましたね？これはただの事故ではない、女の悪霊の仕業だと。

それもただの怨霊ではありません、自然を操る強力な霊力を持った妖怪です。

この妖怪が、『つらら女』に登場する女の一方です。

しかし、前妻と後妻、どちらなのでしょうね？

30年以上前の出来事です、すでに時効ですし、亡者の魂を救うためにも事実を明らかにしましょう。

亡くなった中学生の母親は彼が小学3年生の時に失踪しています。以後いまだに行方は知れません。噂では不倫をして男の下へ走ったのだそうです。

そうですね、少年の母親は不倫をした相手の男の下へ走り、そこでその男に、殺されたのです。

まるで『つらら女』の物語のように、何もかも捨てて走った男の家で、彼女は、男と仲良く暮らす奥さんと、子どもを見たのです」

紅倉の瞳が赤く光る。妖気が立ちのぼる。瞳は過去を視ている。

「その子どもはまだ生まれたばかりです。奥さんの出産のための入院中に夫は人妻と浮気していたのです。

夫にしてみれば奥さんが入院中の羽伸ばしにたまたま出張先で知り合った後腐れのない人妻とちよつと遊んだだけだったのですが、相手の人妻は本気になってしまった。

何もかも捨ててきたという女に男は困惑した。産後まだ不安定な状態の妻は夫の裏切りにショックを受け、しかし女に身を引くように頼んだ。自分たちの幸せを壊さないでくれ、あなたにだって自分の家庭があるでしょ？と。しかし女はそれを捨ててしまったのです。後に引けない女。懇願する妻。夫はウンザリして言い放った、いい加減にしろよ、あんたとはちよつと遊んだだけだろう？ 大人なんだからそれくらい分かれよ、と。

女は、

『コロシテヤル！』

と、思った。

女は台所に駆け込むと包丁を取りだし、男に斬りかかった。

もみ合いになり、はずみで、逆に男の方が女を刺し殺してしまつた。

まあ正当防衛といえるでしょう。

しかし妻の入院中に浮気した相手を殺してしまったのです、法的に無罪でも世間体はとんでもなく悪いです。100パーセント無罪を勝ち取れる保証もないですね。

男は迷つた。妻も生まれたばかりの我が子を抱えて保身に回つた。

「あなた、その死体、どうにかしてよ！」と。

妻にそう言われた男は決心し、人妻の死体を森の中に埋めた。取  
宇美山のふもとに広がる森です。

女の死体を片付けた夫婦は平穩無事な生活を送る、はずでした。

しかし考えてみれば何と馬鹿な恐ろしいことをしてしまったのだらう？と妻が悩むようになった。ただでさえ生まれつきの赤ん坊の世話でたいへんなのです、妻は目に見えておかしくなっていた。夫婦の間に喧嘩が絶えないようになり、妻は自首を口にするようになった。夫にしてみれば冗談じゃない、事件後すぐなら正当防衛で片づいたものを、今さら実はと名乗り出たって、今度は殺人罪はともかく、確実に死体を隠した罪を問われる。

夫は、妻への殺意を募らせていった。

そしてとうとうある冬の夜、夫は計画的に寝ている妻の首にロープの輪をかけ、吊り上げ、自殺に見える形で殺しました。

しかし夫はそのまま妻の自殺を警察に通報することは出来なかった。絶えることのない夫婦喧嘩の間に妻の体には夫の振るった暴力の痕が印されていたからです。

結局男はまた妻の死体を捨てることに決めました。

夫は家を出た妻を捜す振りをして県内〓山形県に住む妻の実家を訪れ、赤ん坊を預けました。そしてそのまま妻の死体を載せた車でまた取宇美山を目指しました。しかしこちらのふもとの森には浮気相手の女の死体が埋めてある。さすがにそこには隠しづらい。そこでわざわざ向こうの、秋田県側の斜面に向かいました。夫婦で登ったことのある比較的楽な登山道の先に、岩肌の露出した高い崖があったのを思い出したのです。

夫は山を車で登れるだけ登ると、妻を背負い夜の登山を必死の思いでしました。初冬のことと雪は申し訳程度に積もっているだけでした。その場所にさえたどり着けば全て上手くいく、そう思えたのです。

崖の上に到着すると男は際に生えている木の根元にロープを結び、

崖の向こうへ妻の体をぶら下げました。ギシギシと、あらかじめ濡らしてもろくしておいたロープを、ぶら下がる妻を揺すって尖った岩にこすりつけました。男がその作業にいそしんでいると、カツと稲光がし、突然の吹雪が吹き荒れました。男が慌てて崖っぷちから避難すると、妻の死体は吹きすさぶ風に激しく揉まれ、大きく行ったり来たりを繰り返していききました。これでもし妻の死体が見つかったら谷底に落下していききました。これでもし妻の死体が見つかったら、死体は激しく損傷し、発見まで時間がかかればかかるほど、自分の暴力の痕跡は消えていくだろう。自分がまったく疑われないということはないだろう、しかし、妻の様子がおかしかったのは多くの者が知っている、疑われても、自分が殺したという決定的な証拠はないはずだ、と男は思いながら吹雪の中遭難しそうになりながら下山しました。

しかし、男が危惧したように妻の死体が見つかることはなく、妻は失踪者扱いで、結局今日まで死体は発見されていません。よほど上手い具合に岩の隙間にはまり込んだのでしょうねえ。

ほっと一安心つける、はずだった夫ですが・・・、そこまでの度胸はありませんでした。女はもうこりこりと、酒に溺れるようになり、けっきょく頭をやられてわずか数年で若死にしました。苦悩の晩年でしたが、全て自業自得です。

さて、これで事件が終わったかというと、わたしの領分の事件はここから始まるのです。

最初の心霊事件は30年前の中学生の事故です。

犯人は自然を操る力を持った妖怪、雪女です。地元に倣ってつらら女と呼びましようか。

その正体は、山の霊力と一体となった女の怨霊です。

さてどつちの女かというと、崖から谷底に捨てられた妻の怨霊です。

山の地神は時として生け贄を求めます。これは人間や頭脳の発達した猿と同じで、強い霊力を持った、高い知能に似た働きを持ってしまった自然霊は、生き物の死を楽しむという悪い性質を持つてしまうのです。

山の神の求める生け贄を、夫は、たまたま妻の死で捧げてしまったのです。

生け贄とされた妻は、山の霊力と一体となり、山の神の化身である妖怪、つらら女へと生まれ変わったのです。

その後6年後、つらら女は自分をこのような物に変身させたにっくき女の息子を見つけます。

あれをどうにかして復讐してやろうと、残忍な計画を立てました。ふもとに雪を降らせ、つもらせ、父親と息子の心を惑わし、操り、息子を木の杭の潜む死のダイブへと導いたのです。

あの山小屋の、VTRに映った女、あれが、凶悪なつらら女の姿です。

さて、では今度はもう一人不幸な女のその後を視てみましょう。不倫の果てに愛人に殺され、森に埋められた女のその後です。

女の霊は成仏などできようはずもなく、この世をさまよい続けました。

いく当てといえは、我が家しかありません。

しかし、一度捨てた我が家に、家族に、入り込むことはできません。

遠巻きに、悲しく孤独に、見ているしかありません。

そして、事故が起こった。

捨てたといえ自分の一人息子が事故で死んだ。いや、殺された！あの憎い女によって！

彼女は怒りを燃え上がらせ、女に襲いかかった。しかし、相手は山の霊力を取り込んだ強力な妖怪です、ただの怨霊である彼女に勝ち目はありません。逆にさんざん叩きのめされ、結界の外へ放り出された。山の強力な霊力そのまま外部の霊への結界となるのです。彼女の悔しさ、怒り、憎しみは、想像が絶するものがありました。何故なら、つらら女は彼女の息子の霊を自分の結界の内部に囲ってしまったのです。つらら女の復讐もまた終わっていないのです。敗北した愛人は正妻への復讐を誓いました。自分も力を付けなければならぬ、妖怪に立ち向かえる強力な悪霊に成長しなければならぬ。だから彼女は周囲に網を張り、自分に同調する霊に取り憑き、取り込んでいったのです。あの神社の写真の目玉。あれがその悪霊の姿です。

彼女の目的は二つ、正妻に捕らわれた息子の霊魂を取り戻すこと、そして、自分もまたこの世に残された正妻の娘を取り殺し、母親に復讐すること」

バン！と、出演者たちの背後の大型モニターにあの髪の毛から覗く目玉が度アップで映し出された。客席がどよめき、背後に気付いたタレントの女の子が「ヒッ」と引きつけを起こしてとうとうスタッフに運び出された。

岳戸由宇も振り返ったまま脂汗を垂らして見入った。

「待て！」

紅倉が鋭く言った。

「すぐに呼んであげる。でももう少しわたしにしゃべらせなさい。

あなたの息子のことよ。

昨年起こった遭難事故。

吹雪を起こして4人を遭難させたのはもちろんつらら女よ。

でも山崎さんを殺したのは彼女じゃない。

あなたの息子よ！

あなたの息子にはつくきつらら女の囚われの身となり、飼い慣らされ、彼女の慰み者になっていたのよ。

でも、そんな化け物のオバさんより若い綺麗な温かい女の子の方がいいでしょ？ だからあなたの息子は恋人の山崎さんに嫉妬して殺したのよ！

あなたの息子ももう完全な雪の化け物よ！ 雪に殺されたのだもの、雪の妖怪になる資格は十分あるわ。

さ、いいわ、出てらっしゃい！

憎いあの女の娘に復讐してやるがいいわ！」

モニターの巨大な目玉は、紅倉の前に立つつらら女の扮装をした幽霊女優綿引響子をじっと見ていた。

彼女が！？

ガ、ガ、ガ、ガ、とセットが揺れた。

紅倉が真っ赤な瞳で魔女の笑みを浮かべて、指さし、言い放った。

「出てこい、悪霊！ あなたの欲しい最高の霊力が、ほら、そこに居るわ！」

岳戸由宇が叫んだ。

「紅倉あつ！ この死体女があつ！！！」

モニターの目玉が、ギョロリと、岳戸を見た。

岳戸は腰を浮かし逃げようとした。膝がガクガク震えて立てなかつた。

目玉が、無限の巨大さで、岳戸に迫り、

「し、死体袋めええつつつ！！！！！」

飲み込んだ。

「う・おおお・おお・おおおお」

岳戸はピヨコンと立ち上がり、ブルブルと痙攣した。上を向いた顔は、完全に白目を剥いている。

「うおおおお・・お」

ピタリと痙攣が収まるとその顔が綿引を見てニタアと笑った。黒目が空洞のように真っ黒で、白目が濃く灰色に汚れていた。

「くつくつくつく。見いーつけたあ〜」

江戸は紅倉の前に立つつらら女を見ている。

彼女、幽霊女優綿引響子が、つらら女の遺児!?

綿引は立ち尽くし、立ちながら半ば失神していた。江戸の周囲の空気が黒く揺らめき、歪んだ。その顔は長年の怨敵に復讐できる喜びに笑みを溢れさせている。綿引は膝がガクガク震え、失禁しそうだった。綿引は本当はホラーなんて大っ嫌いだった。本当はこんな仕事したくなかった。女優になりたいなんて思うんじゃないかと、後悔の涙が頬を流れた。

『お父さん、お母さん、わたし二人の本当の娘じゃなかったの？

そんな嘘だよな？ ね？・・・』

ひどいわよ、と紅倉を恨んだ。ねえ、助けてよ！先生！

紅倉は笑っている。魔女の顔で。

バン！、と、モニターに今度は山小屋の写真が映し出された。紅倉が言う。

「ほら、つらら女。あなたの娘が大っ嫌いなあの女に殺されちゃうわよ〜」

江戸はニヤリと笑った。

「見てろ」

右手を掲げ、グツと握る。

「うっ・・・」

綿引は苦しそくに喉を押さえた。膝をつき、苦しそくに片手で喉を押さえ、片手で助けを求めた。紅倉も言った。

「あーあ・・・、死んじゃうわ」

芙蓉は信じられない思いで紅倉の横顔を見つめた。サディスティックに人の苦しみを愉しむなど、こんなの、先生じゃない！

「先生！！」

芙蓉はたまらず紅倉の両肩を掴んで自分に向かさせた。

「どうしちゃったんです、先生！ こんなのわたしの先生じゃない！！」

紅倉は芙蓉に焦点を合わせるとしらつと言った。

「美貴ちゃん、わたしを信じないの？」

「え・・・」

芙蓉はズキリと心が痛み、紅倉の肩を放した。

八八八八八と岳戸の高笑いが響いた。

紅倉は冷たい顔でモニターに向かって言った。

「バケモノ」

床に這いながら綿引は涙を流して言った。

「助けて・・・お母さん・・・」

ビシツとガラスにひびが入るような音がして、モニターが白くなつた。いや、モニターの表面に、氷が張り、霜しもが湧いた。

岳戸がギラリと睨んだ。

「来たか」

モニターに向かい合う。嘲笑う。

「フン、どうせおまえはそこから動けないんだろう？ 悔しさのたうち回りながら娘の死にいく姿を見るがいい！」

警戒しながらゆっくり綿引に向き直る。歩き出す。両手を何かを掴むようにして、そこから何かを発した。綿引はますます苦しんだ。人の目には見えない。しかし真つ赤に瞳を濡らした紅倉は恍惚的な笑みを浮かべて見入っている。

「もう、死ぬわ・・・」

ガン！カンカンカン・・・ガララララララ・・・

激しい金属音に皆ビクツとして何かと見れば、綿引が登場したとき焚かれたドライアイスの黒いガスボンベがセットの裾から中央に転がり出てきた。

ホースが踊り、ノズルがピタリと岳戸を向いた。

いぶかしげにそれを見ていた岳戸の顔に驚愕が走った。

モニター全面からブワツと白いガスが大量に噴き出した。それはガスボンベに達すると、「ボンツ」と物凄い破裂音を響かせてボンベの口からホースが吹っ飛び、ビシビシビシツと氷の槍が飛び出し

た。それはあつと言う間に3メートルの長さに伸び、岳戸の胸目がけて突き刺さろうとした。

「うわあああああつっっ！！！！！！」

岳戸が恐怖の悲鳴を叫び、紅倉は、ニヤリと笑った。

バキンッ、と氷の槍は砕け散り、ガスとなって散った。

そのガスの中で、岳戸はゆらりと揺れた。うなだれた顔が上を向くと、表情が一変していた。最大級の怒りが、能面のごときマスクの下に張りつめている。瞳は静かで、澄んでいる。

「おのれら、ようもわらわをいよいよに遊んでくれたな」

ピリピリ怒りの波動を発する瞳が宙を見ると、そこに二つの赤い光の玉がまだ争うようにぶつかり合い、弾き飛ばし合っていた。岳戸の怒りが爆発した。

「やめおりようー！」

怒気が、スタジオ中にビリビリ充滿した。子どものように相争っていた二つの赤い光の玉は、まるで気をつけをするようにピタッと静止していた。

芙蓉はそつと自分の手を握る物にハツとなった。紅倉の手だった。じつとりと汗ばんでいる。見れば紅倉の顔には先ほどまでのサディスティックなお茶らけた表情は微塵もなく、蒼白に緊張していた。

「美貴ちゃん」

紅倉は囁くような小声で言った。・・・震えている？・・・

「美貴ちゃん・・・美貴ちゃん・・・」

芙蓉はうなずくようにぎゅうつと紅倉の手を握り返した。先生はわたしが守る！

岳戸が紅倉を見た。

「きさまか。このふざけたお芝居を書いたのは？」

紅倉は一度目を閉じると、無理やり口を笑わせた。

「失礼いたしました。わたしの手には余るもので姫様のお力をお借りしました。退屈のぎに・・・なりませんでした？」

岳戸は笑った。非常に美しく、怖く。

「ふざけたことを。死ぬか？」

「それはご勘弁を。と言いなから姫様、ちゃっかり家来を増やしておいでではありませんか。駄目ですよ、他の者たちは解放して、成仏させてあげてくださいな。その代わり、あちらの二人はいかようにも姫様のお好きになさってください」

「フン」

岳戸は宙の玉を見た。玉は、震え上がった。

「ま、よかろう」

岳戸の体から30ほどの光の玉が放たれ、天井向かって登っていった。紅倉が呆れて言った。

「貯めも貯めたり30年分。皆さん、もう悪い怨霊に利用されず、まっすぐ成仏するんですよ」

光の玉たちは素直に消えた。

「さて」

岳戸が残忍に微笑んで残る二つの赤い玉を見た。

「消されたいか？ それともわらわの家臣となってこの世の未までわらわに仕えるか？」

二つの玉は、家来になることを選んだ。ス、と岳戸の掲げた左の手のひらの中に吸い込まれた。

「さて」

今度は紅倉に言った。

「わらわを表に引っぱり出して、これで済むと思うか？」

芙蓉が前に出ようとすることを紅倉は止め、自分が前に一步出た。

「これで、どうぞお許してください」

紅倉は床に膝をつく、なんと、土下座した。芙蓉も慌てて横に倣った。

「そんなことで小馬鹿にしおって・・・小馬鹿に・・・」

岳戸の能面のようにスツと綺麗だった顔が、見る見る安っぽい笑顔になった。

「あは、アハハハハハ！ 土下座してる！ 紅倉美姫があたしに

土下座してる！ アハハハハ、アハハハハ、アーハハハハハハア・

笑いすぎて、岳戸は後ろにのけ反って、倒れた。床に仰向けになり、ピクピク痙攣した。それでも顔は笑ったままだった。

「さて、と」

立ち上がるうとして、紅倉は「う〜く〜く」とうめいた。

「美貴ちゃん、立たせて」

芙蓉は呆れて笑った。

「はいはい。世話のかかる先生ですね」

手を引きながら、芙蓉は嬉しくてたまらなかった。やっぱり先生は先生だった。自分の大好きな！

「あのー・・・」

といつの間にやらこそこそ隅に隠れていた幽霊女優綿引響子が言った。

「嘘ですよね？ わたしがそのつらら女の娘だったなんて？」

そんな訳がないのだ。病院のベッドで笑顔の母親に抱かれる赤ん坊の自分の写真がちゃんとして残っているのだから。

紅倉は手を合わせて謝った。

「ごめんなさい！ どうしても娘の役が必要だったの！ まさか本当の娘を捜し出してここに連れてくるわけにはいかないでしょう？

ね？この通り！ 許してちょうだい！」

紅倉に拝まれて綿引は笑った。

「この借りは高く付きますよ」

不思議と、あれほど苦しいと思いついて入っていたのが、思い返してみればまったく苦しみがない。自分で演技をしていたとは思えない。これもきつと・・・

綿引は優しい気持ちで微笑んだ。

みんな、この先生の仕業なのだろう。

三津木はブースで考え込んでいた。

つららの杭

この収録は、放送できるのだろうか？と。

## 第8章 密談

「放送してください。でなきゃせつかくのわたしの苦勞が報われないじゃないの」

三津木の相談に紅倉は頬をふくらませて抗議した。あのめちやくちな収録を、果たして放送していいものかどうか相談したのだ。「そりゃわたしだって放送したいですよ。でも・・いいんですか？土下座した姿なんか放送して・・」

三津木の意地の悪い質問に紅倉はまた頬をふくらませた。

「どうぞお好きなように。でも半年間はわたしの出演はありませんからね」

「そんなあ。ずるいじゃないですか？今回はうちの番組の企画ですよ？」

あの後紅倉の指摘によって取宇美山の斜面の崖と、反対の麓の森の搜索が行われた。それぞれ白骨化した女性の遺体が発見された。その搜索の様子はライバル番組「生追跡！真相を探れ」で放送される予定だ。

「冗談です。本当に好きなようにどうぞ」

「こちらも冗談です。先生のおんな姿放送したら、ファンからの抗議で忙殺されます」

二人はいつしよに笑い合った。芙蓉はやっぱりちよつと腹立たしい。

「ところでね、先生」

三津木は居住まいを正して訊いた。

「つらら女の本当の娘って、ひよつとして・・」

「尚美さんのわけないでしょ。その娘はもう36歳。尚美さんはまだ21歳よ」

「ですよね、やっぱり」

三津木はほつとしたように言った。ちなみに幽霊女優綿引響子も

まだ28歳である。

「じゃあその娘は追及しない？」

「当然です。本人は自分の両親のことをまったく知らないはずですから」

紅倉は、それを視て、確認しているのだろう。

三津木も納得した。

「これで常盤尚美は救われますね」

「番組が無事放送されればね。そのためにあんなに頑張ったんだから」

今ひとつよく分かってなくて問いたげな芙蓉に紅倉は説明した。

「死体が2つ見つかって、30年前の犯罪が明るみになった。幽霊はいるんだろ？とみんなが思っただけで、その上であの派手なパフォーマンスがあれば、なるほどつららで男を刺し殺す恐ろしい悪霊なんだと納得するでしょ？ これで尚美さんはかわいそうな被害者決定ね」

芙蓉もなるほど納得したが、しかし、先生の場合こういう時にはたいていもう一つ裏があるのだが・・・

「岳戸さんはその後どうですか？」

岳戸由宇はあれから病院に運ばれて24時間点滴を受けた。退院はしたようだが・・・

「さすがにまいったようですよ。マンションの自宅で休んでいます。でも文句たらたら割には、機嫌はいいようですよ」

「あっそう」

よほど先生の土下座が効いたようだ。

「先生。あの、岳戸さんって・・・」

「三津木さん、ゆっくりなさっていいんですか？」

芙蓉の質問をさえぎるように紅倉は言った。三津木もこういふところはわきまえている。

「そうですね。お邪魔しました。それじゃ先生、数字、期待しててください」

「期待しているのはあなたでしょ？」  
「そりゃごもつとも。またよろしくお願いします」  
「はい」

芙蓉は三津木を玄関まで送っていった。車庫の開閉はこのタッチパネルでモニターを見ながらできる。

収録から3日後、2月はじめの月曜夜のことだ。

芙蓉が帰ってくると広い応接室の大きなソファに小さくお行儀よく座っている紅倉は、なんともか細く、小さく見えた。

「畔田先生くろたのねぎらいのお品、いただきます？」

「そうね。いただきますでしょうか」

芙蓉はてきぱきと準備して戻る。ふと思いついて言う。

「こんな広い部屋は無駄ですね。リビングに行きませんか？」

「うん」

立ち上がった紅倉はテーブルの角に脚をぶつけてこけた。

「先生！気をつけてください！」

「はい」

子どものように言って起き上がった。芙蓉がお盆をテーブルに置こうとするのをいいからいいからと手で制して。

この広い屋敷にはリビングが6つもある。もちろんダイニングは別に。これで平屋なのだ。芙蓉は呆れてしまう。ほとんどの部屋は使われていない。6つあるリビングのうち一番小さな部屋に入った。元々の主が趣味で作らせた音楽を聴くための部屋。重厚なステレオセットとクラシックのLPレコードのコレクションが揃っている。ほとんどが一度も聴かれたことがない。夕食後二人はここでレコードを聴くことが多い。

「何か聴きますか？」

「シューマン」

芙蓉は紅倉のお気に入りの「ピアノ五重奏曲」のレコードをプレイヤーにかけた。

「乾杯」

畔田から送られてきた紅倉の唯一飲めるアルコール、ぬるま湯で薄めた梅酒を飲んだ。そもそも芙蓉もまだ未成年だ。

「見せてください」

先ほどテーブルにぶっつけた右の脚を自分の膝の上に投げ出させた。先生には厚手のパンツの下に更に厚手のタイツをはかせている。それをめくり上げると、

「あーあ、やっぱり」

ぶっつけたすねが青黒くなっている。

「本当に気をつけてくださいね」

脚に厚着をさせているのは先生が寒がりなばかりではない。こうしてどこかにぶつけてケガをしても、感覚が非常に鈍いのだ。食べ物だって、味の濃い物や辛い物はすぐに口が腫れるし、お腹を壊す。熱い物も冷たい物もダメだ。

いったい何を楽しみに生きているのだろう・・・と芙蓉は悲しくなつたものだ。

芙蓉はあざを優しく撫でた。

「あたたかい」

紅倉は気持ちよさそうに目を閉じた。芙蓉の手には傷を癒す力があるそうだ。芙蓉が唯一胸を張れる能力だ。先生の役に立てるから。「お礼の電話をかけたら畔田先生褒めてらっしゃいましたよ、岳戸先生を利用するとは恐れ入ったと。どうしても気になって三津木さんに頼んで収録テープを見せてもらつたそうです。収録時間中は神棚に手を合わせていたそうですよ。きつと何時間もずっとですよ」

「先生らしいわね。ありがたい人だわ。」

美貴ちゃん、聞きたい？いろいろ」

「はい」

「うん。・・・」

そもそも山崎さんの死だったのよね、事件は。

彼を殺したのは尚美さんよ。

最初から明らかなように」

「先生はそれを、隠した」

「大嘘をついて、大芝居を打って、ね。」

だってかわいそうじゃない、あの状況で尚美さんはいかなる非難も受けるべきではないわ。仕方なかったのよ、彼を殺してしまったのは」

「山崎さんに襲われて・・・ですか・・・でもどうして犯人が雪男なんです？ そのままつらら女の仕業にしちゃえばすっきりするのには？」

「それは彼の母親を納得させるため。息子はもう敵の女の虜になってバケモノになり果ててしまったと。あの山から引き離せるのはあの女か息子かどちらか一方しか無理だったから。さすがにわたしも山の霊力そのものと戦争する力はないわ。山の霊力にしてもいい加減あの女にはうんざりしていたようだし、引き離しやすかったのよ。」

その息子だけだ。

もう一度彼の死を考えてみましょうか。

死の状況が山のつらら女に用意されたものだというのはわたしも岳戸さんに同感。

でも彼も「死んじまえ」という気はあったのね。もちろん本気でじゃないけれど。若いときにはそういう気分であるでしょ？ 彼は中学卒業後地元農協に就職が決まっていたそうだけど、それは彼の本意ではなかったでしょう。本当は彼だっけって高校に進学して、遊んで、恋をしたかった。もちろん進学せずに就職するのだって悪いことじゃないわ。そういう人生を選択して充実した毎日を送っている人だっけってでしょう。けれど彼は違った。家の経済的理由で進学を断念しただけ。

ねえ、想像してみて？

いかに雪が降り積もっていて安全とはいえ、後ろ向きに屋根から

落下するなんて、すごく怖いんじゃない？

遊びとはいえ「死んじまえ」とダイブした彼の心は擬似的ではあるけれど自殺者のそれだった。

もつと遊びたかった。恋したかった。女の子とエッチもしたかった。どうせオレの人生お先真つ暗だ。

とまあ、センチメンタルな気分にはひたっていたことでしょうね。それが思いがけずグサツと、本当に死んでしまった。

青空を瞳に映しながら、彼には自分が死ぬということがまったく信じられなかったでしょうね。そうした気分もしょせんぜんぶ遊びだったんですから。

死んでしまった彼の気持ち、「なんだよ、冗談じゃねえぞ!？」ってところでしょうね。

だから簡単につらら女の誘いに乗った。

自分を死に至らしめた相手だったけれど、彼女は、女で、自分の欲求を満たしてくれるから。

幽霊は成長なんかしないわ。変質するだけだね。基本的に死んだときの精神がそのまま何十年何百年と持続するわ。

今も、彼は中学3年生のままよ。その年頃の女性観ってどんなものかしら？

まさかロリコンはないわよね？ 同級生の女の子なんてみんなやかましいだけのガキに見えるでしょうね。異性への憧れは自ずと年上のお姉さんに向かうでしょうね。

ところがこれが微妙なところで、つっぱったつてしよせん中学生の子どもだし、自分自身的にはぜんぜん未発達、性的な欲求ももやもやがあるだけで精神的に明確な形はなさない。

ま、要するに、マザコンね。母性的なものをより強く求めてしまふのね。特に彼の場合小学3年生の時に母親が失踪しているわけだから、愛憎相半ばでしょうね。

つらら女は彼のそうした精神性に上手く付け入って取り込み、基本的に彼の精神性はずっとそのままだったわけよ。

で、30年後の現在。

4人が遭難した吹雪は、最近顕著な異常気象のせいでしょうね。

山崎さんと尚美さんの二人だけが山小屋に避難したのも偶然。

二人が吹雪に閉じ込められて取った行動、それが、中学3年生の男の子を強く刺激したんでしょね。

彼は、山崎さんに取り憑き、自分が尚美さんの恋人になり、なおかつ、尚美さんの胎内に入り込み、尚美さんの母性に守られてあの山を脱出しようとしたのよ。

でも彼は初めての生身の女性相手の行為にすっかり舞いがってしまって、興奮しすぎて、焦って、上手く出来なくて、すっかり頭に来て、尚美さんを暴力的に従わせようとしたのよ。だから尚美さんはすっかり様子のおかしくなってしまった山崎さんに恐怖し、逃げ出したのよ。そして激昂して追ってきた山崎さんをつららで刺し貫いてしまった。

・うーん・・・

でもやっぱりつらら女が尚美さんに山崎さんを殺させたのね。自分から逃げ出そうとした罰に。山崎さんの胸を貫いたつららに、彼の魂は封じ込められていたんだわ」

それで週刊誌に載った写真でつらら女はじつと山崎さんの倒れていた場所を見ていたのか。逃げだそうとしたペットに「どうだ、思いついたか！」とお灸を据えて。

なんだ、自分の見立ては全然的はずれだったじゃないか。

「遭難事故の事件はこれでお終い」

「尚美さんが記憶を失っていたのは恐怖のためですよ？ それとも恋人を殺してしまった罪の意識ですか？ いずれにしても彼女がその記憶を思い出すことはないんですか？」

「ないわね。わたしがすっかり偽の記憶を植え付けておいたから、すっかり入れ替わっているわ」

「いいんですか、そんなことして？」

「それで幸せになれるんならいいでしょ？」

「はあ・・・」

まあ、いいか・・・。

「今回先生がこの仕事を引き受けたのは尚美さんを救うためだったんですね？」

「うん。それと、将来危害の加えられる危険のあるつらら女の娘さんを守るためにね。あーあ、わたしってなんていい人なのかしら？」  
照れ隠しにうそぶく先生を芙蓉は微笑んで見つめた。

「それで先生、等々力さんたちが取材に行ったとき、また吹雪になって、山小屋に閉じ込められましたよね？ あれも偶然ですか？」

「いえ、あれはつらら女の仕業。わたしがそうするようにちよつとした仕掛けをしておいたの」

「どんなイタズラをしたんですか？」

「三津木さんに入れ知恵してね、わたしの霊力を込めた尚美さんの写真を等々力さんに渡してもらっただけ。つらら女はまた尚美さんが舞い戻ってきたと思って様子を見に来て、しかもおかしな霊力を感じて、すっかり混乱したのね。おかげでいい画が撮れたわよね」

つらら女が捜していた「女」は尚美だったのだ。

芙蓉は呆れながら次の質問をした。

「七五三の神社の写真、あれは偶然でしょうか？」

「偶然というより、あの愛人女の執念でしょうね。あの女は霊力を集めながら常にチャンスを探っていた。わたしの方でもいろいろ網を張っていたから、上手くキャッチされちゃったのね」

「やっぱり先生のせい、・・・だったんですね？」

「人を疫病神みたいに言わないの。だいたい引っぱり出されたのはわたしの方なんだから。でもおかげで因縁の二人を対決させて一気に方をつけることが出来たわ」

「それです、一番聞きたいのは！」

芙蓉は紅倉の脚を撫でていた手を止めて真剣に見つめた。

「何故岳戸さんを引っぱり出したんです？ 岳戸さんって、何者な

んです!？」

「岳戸由宇」元テレビタレントの目立ちたがり屋の三流霊能師。と、芙蓉はずっと思い込んでいた。しかし、あの圧倒的な力は、正なのか邪なのか? あまりに圧倒的でその判断さえ付かなかった。

「岳戸、由宇さん・・・」

紅倉も目を伏せ、ため息をついた。

「テレビを見ている人をビジュアル的に納得させるために派手な演出が必要だったのよ。そのために彼女の力が必要だったんだけど・・・正直、わたしも彼女を利用するのは勇気が必要だったわ。下手をすれば、何十人と死者が出るところだったわ、もちろん、わたしも、美貴ちゃんも含めてね」

それほどまでに・・・恐ろしい物だったのか・・・何者!？」

「彼女の守護霊。いえ、守護霊というにはあまりに強く彼女の肉体と結びついてしまっているわ。」

おそらく、彼女がわたしの最期の敵になるでしょうね、

又イ姫」

又イ姫。

まったく知らない。しかし芙蓉はその名前を聞いただけでゾゾッと全身に戦慄が走った。

紅倉は芙蓉を安心させるようにニコツと笑った。

「まだまだしばらくはケンカしないように気をつけましょうね。ま、使いようによつては便利な力だから」

「先生、あんまり危ないことはないでください!」

芙蓉は本気で心配して言った。あれほど巨大な力を抱えていたとは、岳戸由宇の人物が壊れているのも納得できる。肉体だって、きつと・・・そしてそれは、先生だって同じなのだ・・・

芙蓉は床に膝をついて紅倉の脚のあざに口づけした。

紅倉はその感触を味わいながら話を続けた。

「つらら女も宿敵の怨霊も、又イ姫の霊体に吸収されてしまった。もう永遠に姫の奴隷よ。中学生の坊やも、新たに取宇美山の霊力の人格に収まって山の神になったわ。神になれば、人間的な欲求も収まるでしょう。新たに神としての欲求が生まれるでしょうけれど。人間の俗っぽい欲求を捨てられなかったつらら女は、そもそも山の神失格だったのね。以上、取りあえず今回の事件はこれで全て解決よ」

レコードは、とつくに針が上がっている。紅倉が言った。

「美貴ちゃん。あなたも女の子らしく恋でもしたら？」

「してますよ、熱い、恋を」

芙蓉は立ち上がり、レコードを裏返してセットした。スピーカーからブツブツとスクラッチ音が聞こえ、再びシューマンが流れ出した。今度はピアノ四重奏曲。シューマンの音楽は青年の情熱と老人の悲観と、恋する歌心がある、と先生のお付き合いで聴いて素人ながらに感じている。

先生はお行儀よく脚を揃えて座り、となりに芙蓉の来るのを待っている。

芙蓉は微笑んで先生の隣へ、自分の席へ、向かう。

頬が熱い。梅酒に、ちよっと酔ったか。

終わり。

## 第8章 密談（後書き）

「つらら女」が本当にいるとはまったく知りませんでした。第2章まで書いてきて、「雪女」について調べたら載っていたのですね。しかも地図を見て適当に選んだ秋田県のお話とは！ おかげで今回は途中から話の方向が変わりました。却って上手くまとまったかと思いますが。

わたしは小説を書いているとこういうことってけっこうあります。自分が書いているというより物語に書かされているような……。雪女の話も驚くほどスラスラ書けてしまいました。ですから内容的に掲載するのはどうか？と迷いましたが、そのまま載せました。

雪女の祟りがありませんように。

ありがとうございます。

2008.1.21

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4464d/>

---

つららの杭

2009年3月24日10時25分発行